

大阪音楽大学 研究紀要

第五十五号

論文等要旨 (1)

論 文

1928年ウィーンにおけるシューベルト没後100年
——3つの音楽祭とラジオ番組を中心に—— 西村 理 (5)

『ドイツ伝説集』における「子ども」をめぐる怪異
..... 植 朗 子 (22)

研究ノート

本学における初年次教育へのPBLの導入
- 独自のアンケートからの読み取り - 高 橋 徹 (35)

トーマス・マンの『ファウストゥス博士』における古楽観 杉 山 恵 梨 (48)

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目、
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目 (2015年度) (58)

2016年度 研究助成報告 (63)

大 阪 音 楽 大 学
大阪音楽大学短期大学部
(2016)

論 文 要 旨

Article Summaries

【論 文】

Articles

1928年ウィーンにおけるシューベルト没後100年 ——3つの音楽祭とラジオ番組を中心に——

西村 理

1928年、ウィーンの作曲家フランツ・シューベルト(1797~1828)は没後100年を迎え、ウィーンではこの作曲家を称える3つの音楽祭が開催された。すなわち第10回ドイツ合唱同盟祭、オーストリア連邦政府とウィーン市が別々に主催するシューベルト没後100年祭である。その一方で、オーストリアのラジオ放送局であるRAVAGは、これらの音楽祭のコンサートも含めて、独自にシューベルトに関連する番組を放送していた。

本論文の目的は、RAVAGの機関誌『ラジオ・ウィーン Radio Wien』に掲載された番組表に基づいて、シューベルト関連の番組の意義を考察することである。その結果、RAVAGでは、シューベルトの歌曲にとどまらず幅広いジャンルを放送するだけでなく、伝記についての講演も放送し、シューベルトの創作全体を伝えようとしたことが明らかになった。そうした枠組みのなかに3つの音楽祭も組み込まれ、RAVAGの放送によってシューベルトはヨーロッパ各国の調和の象徴としての役割を担うことになったのである。

キーワード：シューベルト没後100年、音楽祭、ラジオ放送、RAVAG、ラジオ・ウィーン

1928 Schubert Centenary in Vienna: An Analysis of Music Festivals and Radio Programs

NISHIMURA Osamu

In 1928 three music festivals were held in Vienna to celebrate the centenary of Viennese composer Franz Schubert (1797-1828). These were the 10th festival of the German Choral Association (Deutscher Sängerbund), and the two Schubert centenary festivals organized separately by the Austrian federal government and the city of Vienna. Meanwhile, the Austrian radio broadcasting company RAVAG, was broadcasting next to the concerts of the music festivals also independent programs about Schubert.

The aim of this paper is to examine the meaning of the programs about Schubert, based on an analysis of the program information published in RAVAG's magazine *Radio Vienna (Radio Wien)*. The results show that RAVAG did not restrict its coverage to Schubert's songs, including not only a wide range of music genres but also reports about his life, covering Schubert's whole work. The three music festivals were included into this framework. Through these broadcast programs Schubert was turned into a symbol of harmony between all European countries.

Keywords: Schubert Centenary, Music Festival, Radio Broadcast, RAVAG, Radio Wien

【論文】

Articles

『ドイツ伝説集』における「子ども」をめぐる怪異

植 朗子

19世紀初頭に編纂されたグリム兄弟 Brüder Grimm の『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* には、「子ども」のモチーフと、それに関連する不思議な出来事、怪異に関する伝承が収録されている。伝説集の舞台は、現代よりも、子どもの死がより身近であった近代以前の時代であり、モチーフとしての「子ども」は異界に接触しやすい存在として描かれている。伝説は、民間伝承においてメルヒェンや神話よりも「事実性」が示される文学ジャンルであるが、「子ども」の身の上で起こった奇怪な出来事や、「子ども」が遭遇した怪異が数多くのこされている。

本論文では、『ドイツ伝説集』の「子ども」のモチーフが登場する伝説を話型から分類し、そのモチーフの特性ごとに整理する。そして、「子ども」のモチーフが伝説の話型で担っている役割と「子ども」をめぐる怪異について考察する。

キーワード：子ども、怪異、モチーフ、ドイツ伝説集、グリム兄弟

Das Kind als das Motiv und die Wunder in den *Deutschen Sagen*
der Brüder Grimm

UE Akiko

Am Anfang des 19. Jahrhundert veröffentlichten Jacob (1785 - 1863) und Wilhelm (1786 - 1859) Grimm eine Sagensammlungen, die *Deutsche Sagen* hieß. Die Sage will Wirklichkeit vermitteln, Dinge in Sagen beruhen auf tatsächlichen Geschehnissen. Aber die Welt der Sagen ist voll von Wundern. Dabei erscheinen die Kinder als grausiges Motiv der Handlung (Wechselbalg, Gespenst, Monster, ein übernatürliches Wesen...) im ersten Band (Ortssagen) der *Deutschen Sagen*. In diesem Aufsatz versuche ich, die Überlieferungen über Kinder in deutschem Volksglauben zu erklären. Zum Beispiel die Frage, warum die deutschen Volkssagen als Ursache mysteriöser Situationen von dem Motiv der Kinder erzählen? Das Motiv der unheimliche Kinder in deutschen Sagen, denn das ist ein typisches Symbol für Todesangst.

Keywords: das Kind , Wunder, das Motiv , *Deutsche Sagen*, Brüder Grimm

【研究ノート】

Notes

本学における初年次教育への PBL の導入
- 独自のアンケートからの読み取り -

高橋 徹

本学では 2014 年度から初年次教育に PBL (Project-Based Learning=課題解決型学修) を取り入れている。われわれは学生の反応を知るために 3 年度にわたってアンケートを実施した。全学的に実施している授業評価アンケートとは別の、PBL に特化したシンプルなアンケートである。

本稿は 3 年度にわたる PBL を取り入れた初年次教育を記録するとともに、アンケートの分析結果を記すものである。

キーワード：初年次教育、問題解決式学修、課題解決型学修、アクティブ・ラーニング、コミュニケーション能力

Introduction of Project-Based Learning into the First Year
Experience of Osaka College of Music
- Analysis of a questionnaire responses -

TAKAHASHI Tohru

Project-Based Learning was introduced into the First Year Experience of Osaka College of Music in 2014. We have continued to conduct a questionnaire in order to know the reaction of the students. It is the simple questionnaire focused on PBL. This paper is a record of three years of the First Year Experience with a focus on PBL and is the analysis of a questionnaire responses.

Keywords: First year experience, Project-Based Learning, Problem-Solving-Learning, Active learning, Communication ability

【研究ノート】

Notes

トーマス・マンの『ファウストゥス博士』における古楽観

杉山 恵梨

トーマス・マン (1875-1955) の小説『ファウストゥス博士』(1947) は、主人公である作曲家アドリアーン・レーヴァーキューンの生涯が、第二次世界大戦で崩落を迎えようとするドイツの状況と重ねて、書かれている作品である。『ファウストゥス博士』における、これまでの音楽学的な考察としては、現代音楽とその作曲技法や音楽家に焦点を当てた研究は見られたものの、ほぼ同じ頃に演奏実践の分野において成立した、古楽の問題を主題とする研究は少ない。

本稿は、『ファウストゥス博士』から古楽に関わる事象を挙げ、ドイツにおける古楽運動史と照合させることで、1940年代までのドイツの古楽について再検討を試みるものである。

キーワード：古楽、トーマス・マン、『ファウストゥス博士』、演奏実践、オリジナル楽器

A View of Early Music in Thomas Mann's *Doktor Faustus*

SUGIYAMA Eri

Thomas Mann (1875-1955) 's novel *Doktor Faustus* (1947) focuses on the life of the composer Adrian Leverkühn, and was written with the period of World War II. Although several papers have focused on the problem of the technique of compositions in those days, described in the novel, little attention has been given to the relation between *Doktor Faustus* and early music.

In this paper, quoting several lines from the novel which related to the early music from *Doktor Faustus*, I would like to reconsider German early music movement until the 1940's.

Keywords: early music, Thomas Mann, *Doktor Faustus*, performance practice, original instrument

【論 文】

1928年ウィーンにおけるシューベルト没後100年 ——3つの音楽祭とラジオ番組を中心に——

西村 理

はじめに

1928年、ウィーンの作曲家フランツ・シューベルト（1797～1828）は没後100年を迎え、ウィーンではこの作曲家を称える3つの音楽祭が開催された。すなわち第10回ドイツ合唱同盟祭^①、オーストリア連邦政府とウィーン市が別々に主催するシューベルト没後100年祭である。3つのシューベルトに関する音楽祭を扱った代表的な研究に、ガブリエレ・ヨハンナ・エーダーGabriele Johanna Ederのものがある。エーダーは、オーストリア第1共和国時代のウィーンの音楽祭を扱った著作において、運営や日程と演奏曲目について詳しく扱っている（1991）。他にも第10回ドイツ合唱同盟祭を扱った研究に、ヘルムート・ロース Helmut Loos（2000）やマンフレート・パーモーザーManfred Permoser（2014）のもの、オーストリア連邦政府とウィーン市とのシューベルト没後100年祭を扱った研究に、山口真季子のものがある（2014）。

ただし、ウィーンでのシューベルト受容を明らかにしようとする場合、対象となるのは、これらの音楽祭だけではない。もちろんこれらの音楽祭以外にもコンサートが開催されていたとしても、それらよりも重要なのはラジオ放送されたシューベルトに関連する番組である。なぜならばラジオ放送によって、実際にコンサートに行かなかったウィーン市民も、シューベルトの音楽を聴くことができたからである。

しかし、1928年を通してラジオでどのようなシューベルトに関する番組が放送されたかを調査した研究はない。そこで本論文では、1924年10月1日から放送を開始したRAVAG^②の機関誌『ラジオ・ウィーン Radio Wien』に掲載された番組表から、1928年にウィーンで放送されたシューベルトに関連する番組を明らかにし、ラジオ番組が果たした役割を考察することを目的とする。もちろんエーダーも述べているように、3つの音楽祭のなかのコンサートがラジオでも放送されている（Eder 1991）。そこで、まず3つの音楽祭を概観し、続いてこれらの音楽祭の放送も含めてRAVAGでのシューベルトに関する番組について扱う。

1. 1928年の3つの音楽祭

1.1 第10回ドイツ合唱同盟祭

ドイツ合唱同盟（Deutscher Sängerbund）は、19世紀にドイツ語圏各地に数多くあった市民合唱団の中心的な連盟として1862年に設立された。その目的は、ドイツ男声合唱

団の養成だけではなく、「ドイツ諸民族 (Stämme) の民族的な (national) 団結を強めることであり、祖国の統一と力を協力すること」でもあった (Eder 1991: 155)。

第 1 回ドイツ合唱同盟祭は 1865 年にドレスデンで開催された。開催地はその都度、選ばれ、第 2 回が 1874 年にミュンヘン、第 3 回が 1882 年にハンブルク、第 4 回が 1890 年にヴィーン、第 5 回が 1896 年にシュトゥットガルト、第 6 回が 1902 年にグラーツ、第 7 回が 1907 年にブレスラウ、第 8 回が 1912 年にニュルンベルク、第 9 回が 1924 年にハノーファーで行われた (Eder 1991: 404)。第 1 次世界大戦後、初めての連盟祭となった第 9 回の時に、1928 年の第 10 回の開催地がどこで開催されるかが決められたが、その際に候補地となったのは、ドレスデン、フランクフルト、ライプツィヒ、ヴィーンであった。ヨーゼフ・ヤクシュ Josef Jaksch が、この年にシューベルト没後 100 年を迎えるのでヴィーンが開催地に相応しく、また連盟祭の「民族的な national」意義も主張したため、ヴィーンが多くの票を集め、開催地となった (Eder 1991: 156f)。

こうして第 10 回ドイツ合唱同盟祭は、1928 年にヴィーンで 7 月 19 日から 23 日にかけて開催された。この音楽祭のためにプラーター公園に、10 万人 (舞台に 3 万人、客席に 7 万人) 収容可能な巨大な「合唱ホール Sängershalle」が建設された (*Neue Freie Presse* 10. 6. 1928: 16)。

7 月 19 日はまず午後 4 時 30 分からコンツェルトハウスの大ホールで「ドイツ合唱同盟の連盟旗の引き渡し儀式 Feierliche Übergabe der Bundesbanners」が行われた。マルシュナーの《自由の歌 Liedesfreiheit》に続いて、第 9 回の開催地ハノーファーの前市長グスタフ・フィンケ Gustav Finke が、連盟旗をドイツ合唱同盟会長フリードリヒ・リスト Friedrich List と音楽祭委員会委員長ヤクシュに渡し、ハイドンの《神よ守りたまえ (皇帝賛歌) Hymne an Gott》などが歌われた (*Festführer* 1928: 75)。

同日午後 7 時から合唱ホールで「公式歓迎の夕べ Offizieller Begrüßungabend」が行われた。その場でヤクシュは、「今、ヴィーンに来ているヨーロッパ、アフリカ、アメリカの兄弟を一体化させるのは、たったひとつの考えである。古のゲルマニア、すなわち地上のあらゆるドイツ人連合の復興の時がくるに違いないという考えである」と述べた (*Neue Freie Presse* 20. 7. 1928: 6)。このようにドイツやオーストリアのみならず、世界各地のドイツ語合唱団が集結したヴィーンで、ドイツ民族の団結を強めるというドイツ合唱同盟の目的が確認されている。

第 10 回ドイツ合唱同盟祭の期間中、プラーター公園の合唱ホールを中心にコンサートが開催されたが、とりわけ 7 月 22 日にリングシュトラッセで 8 時間に及んで行われたパレードには、約 100 万もの人々が集まった (*Neue Freie Presse* 23. 7. 1928: 4)⁽³⁾。

パレードに先駆けて、ブルク門前で午前 9 時半から「シューベルトへの敬意 Schubert-Ehrung」が始まり、吹奏楽の伴奏でシューベルト《音楽に寄せて An die Musik》やマックス・シュプリンガー Max Springer の《シューベルト賛歌 Hymne an Schubert》が歌われた。《シューベルト賛歌》の最後の響きとともに、パレードが始まった (*Neue Freie*

Presse 23. 7. 1928: 2)。9000もの合唱協会のなかで、ウィーン・シューベルト同盟 Wiener Schubertbund は、パレードに大きなシューベルトの人形を乗せた馬車で練り歩いた (*Offizielles Erinnerungsalbum an das 10. Deutsche Sängerbundesfest Wien 1928* 1928: 184)。

パーモーザーによれば、第10回ドイツ合唱同盟祭の期間中に、250もの合唱作品が演奏されたが、そのなかでシューベルトのオリジナル作品は16曲しかなかったものの、シューベルトは、この音楽祭でドイツ・ナショナリズムの愛国者として位置づけられた (Permoser 2014: 81)。

1.2 ウィーン市主催のシューベルト没後100年祭

第1次世界大戦後、オーストリアではキリスト教社会党と社会民主党が対立し、「赤いウィーン」とも呼ばれるように、ウィーンでは労働者を支持基盤とする社会民主党が政権を担い、同党カール・サイツ Karl Seitz が市長であったのに対して、農村部で支持を得ていたキリスト教社会党がオーストリア連邦政府の中心となり、ミヒャエル・ハイニシュ Michael Hainisch が大統領であった。両者の対立が強まるなか、オーストリア連邦とウィーン市それぞれがシューベルト没後100年祭を企画した。その結果として、命日のある11月中旬には、2つのシューベルト祭の両方が開催されることになった。

ウィーン市主催のシューベルト没後100年祭は2部に分けられ、第1部が6月3日から17日、第2部が11月15日から19日に開催された。また第1部の期間は、5月16日から7月25日にかけてメッセパラストで開催されていたウィーン市主催のシューベルト没後100年展覧会とも重なっていた (Eder 1991: 206)。

第1部はウィーン祝祭週間に組み込まれ、3日のオープニング・コンサートは市庁舎前広場で、フランツ・シャルク Franz Schalk 指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で交響曲第8番ハ長調「グレイト」が演奏された (*Neue Freie Presse* 4. 6. 1928: 5)。第1部の期間中、広場とシューベルトの生家でコンサートが開催され、前者ではオーケストラ作品と合唱曲、後者では室内楽曲と歌曲を中心に演奏された (山口 2014: 21)。またシューベルト没後100年展覧会では、歌曲と合唱曲が重視され、交響曲や室内楽曲、教会音楽が1部屋にまとめられたのに対して、1部屋すべてが合唱曲の展示に用いられた (Eder 1991: 206)。

第2部の最終日はシューベルトの命日11月19日であったが、その頂点は日曜日である18日となった。第2部は芸術的・政治的な観点で、連邦政府のエリート的なシューベルト100年祭に張り合おうというもので、シューベルトを「全ウィーン民衆」の息子として位置づけた (Eder 1991: 207-208)。11月15日に学士院祝祭ホールで開催された第2部のオープニング・コンサートでは、合唱曲と歌曲が重要な役割を担い、期間中にシューベルトのゆかりの場所で開催されたコンサートでは、合唱だけ、もしくは合唱を中心に構成され

ていた (山口 2014: 21)。

全体としてヴィーン市主催のシューベルト没後 100 年祭では、彼の器楽曲は周辺に、合唱曲や合唱用に編曲された歌曲が中心に置かれ、「歌曲王シューベルト」のイメージが強調された (山口 2014: 23)。その意味で、このシューベルト没後 100 年祭は、第 10 回ドイツ合唱同盟祭と同じ傾向にあった。ただし、社会民主党の支持基盤である労働者による合唱団は、ブルジョワの第 10 回ドイツ合唱同盟祭には参加しなかった。労働者による合唱団にとって、この年の大きなイベントは、8 月 5 日にプラーター公園の合唱ホールで行われた《労働歌 *Lied der Arbeit*》60 年記念祭であった。しかし、この祭は、ヨーゼフ・シヨイ Josef Scheu が《労働歌 *Lied der Arbeit*》を作曲してから 60 年目であることを祝うことが中心となり、シューベルトとは関係がなかった。オーストリア労働者合唱同盟 *Österreichischer Arbeitersängerbund* は、ヴィーン市主催のシューベルト没後 100 年祭で 11 月 18 日に市庁舎前広場で行われたコンサートに参加することで、没後 100 年を祝ったのである (Permoser 2014: 84-85)。

1.3 オーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭

オーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭は文部省が中心となり、楽友協会やコンツェルトハウス協会の企画を巻き込み (Eder 1991: 216)、11 月 17 日から 25 日にかけて行われた。エーダーによれば、「楽友協会とコンツェルトハウス協会は、素晴らしいソリスト、アンサンブル、オーケストラと契約することによってシューベルト作品を、しかもひたすらシューベルト作品を、模範的な形で演奏を届けようとした」 (Eder 1991: 25)。この記念祭では、宗教曲、歌劇、交響曲、室内楽曲、合唱曲、ピアノ曲といった幅広いジャンルが採り上げられたものの、交響曲全曲や歌曲全曲といった演奏会はなかった (山口 2014: 25)。

この没後 100 年祭に続いて 11 月 25 日から 29 日まで文部大臣リヒャルト・シュミッツ Richard Schmitz の後援による国際シューベルト会議が開催された。この会議は、「フランス・シューベルトを祝祭年に学問的にも祝うという考え」 (Haas and Orel 1929: XI) のもとで行われた。

このようにオーストリア連邦政府主催の没後 100 年祭では、ヴィーン市主催のものとは異なり、民衆に人気のあった歌曲や合唱曲に偏らずに、エリート的な方向性が示されていた。そして、オーストリアをドイツと同格と捉え、オーストリアの偉大な遺産の 1 人としてシューベルトが強調された (山口 2014: 30)。

ただし、シューベルトの命日の 11 月 19 日に没後 100 年祭で行われたヴィーン大学の音楽学の教授ローベルト・ラッハ Robert Lach の講演「シューベルトの音楽におけるエートス *Das Ethos in der Musik Schuberts*」は論争をまきおこした (Permoser 2014: 87)。彼はドイツ民族主義的で、反ユダヤ主義的な考え方に基づき (Permoser 2014: 87)、「闘争

的なエートス *Kampfethos*」をもつパツハ、ベーターヴェン、ヴァーグナーと、シューベルトを対比させ、シューベルトの芸術上の欠如を指摘した (*Wiener Zeitung* 27. 11. 1928: 4-5)。ラッハは、国際シューベルト会議でも「シューベルトと民謡 *Schubert und das Volkslied*」という報告を行っているが、そこでも政治的な考え方が、音楽美学的な価値判断を規定した (Permoser 2014: 89)。こうしたラッハのシューベルトの見方に対して、専門家の大部分が理解を示さず否定した (Permoser 2014: 88)。例えば、国際シューベルト会議では、作曲家エルンスト・クシュネク Ernst Křenek は、「フランツ・シューベルトと私たち *Franz Schubert und Wir*」という講演で、シューベルトのオーストリア性を肯定的に論じた (Permoser 2014: 89-90)。

2. ラジオ・ウィーン

2.1 RAVAG とその音楽番組

RAVAG は 1924 年 10 月 1 日に放送を開始した公共放送で、1938 年にドイツとの合邦 (アンシュルス) によって中断された。株式は、ウィーン市が 20.25%、グラーツのシュタイラー銀行が 20.25%、監督官庁である通商省が 20.25%、政府関係機関のオーストリア金融機関が 21.25%、ラジオ産業ほかかが 18% を所有した (Ergert 1971: 45)。RAVAG の設立者オスカル・チャイヤ Oskar Czeija 総監督のもと、マックス・アスト Max Ast が音楽番組監督に、ベルト・シルヴィンク Bert Silving が音楽監督に就任した⁽⁴⁾。RAVAG は放送開始直後の 10 月から機関誌『ラジオ・ウィーン *Radio Wien*』を毎週発刊し、番組欄や番組に関連記事、歌曲の歌詞、リブレット、ラジオの機器の技術的な記事などを掲載した。この RAVAG の中心であるウィーンの放送局が「ラジオ・ウィーン *Radio Wien*」である⁽⁵⁾。

RAVAG が放送を開始した月では、放送時間は全体で 113 時間であったが、そのなかで 94 時間が音楽を占めていた。分野別では真面目な音楽 (*Ernste Musik*) が 36 時間、軽音楽が 52 時間、オペラが 6 時間であった (Ergert 1971: 61)。しかし、大部分が小編成によるサロン音楽であった。つまり、ヴァイオリン 2、チェロとピアノという編成、協奏曲でもピアノ伴奏、声楽もピアノ伴奏であった (Ergert 1971: 60)。スタジオからの放送で、空間的な制約があったからである。とはいうものの、1925 年 1 月 11 日以降は、大きなスタジオからオーケストラの演奏が放送されるようになった (Ergert 1971: 62)。

RAVAG の音楽番組はスタジオからの放送に加えて、1925 年 5 月 24 日にコンツェルトハウスでのオーストリア労働者マンドリン・オーケストラのコンサートを試験的に中継放送した (Ergert 1971: 64, *Radio Wien* 24. 5. 1925: 9)。その後、オーケストラや合唱などのコンサートがコンツェルトハウスから中継放送されるようになった。そして、1926 年 3 月 12 日からウィーン国立歌劇場から中継放送が行われるようになった (Ergert 1971: 86, *Radio Wien* 8. 3. 1926: 946)。

最後に残ったのが楽友協会である。1927年3月26日から31日にかけてヴィーンではベートーヴェン没後100年祭が開催されたが、命日の26日に11時から楽友協会大ホールで行われたコンサートが中継された (*Radio Wien* 21. 3. 1927: 1228)⁶⁾。しかもこの放送は、ザグレブ、ブルノ、フランクフルト、ミュンヘン、ニュルンベルク、プラハ、ブラチスラヴァ、シュトゥットガルト、ワルシャワにも放送された。この各国への放送は、国際放送の試験でもあった (Ergert 1971: 88)。

こうして1927年にはヴィーン市内にある主要なコンサートホールや歌劇場から中継放送が行われるようになった。このような状況のなかで1928年シューベルト没後100年は迎えられた。

2.2 1月から10月までのシューベルトに関する番組

ラジオ・ヴィーンでのシューベルト没後100年に関連する番組には、コンサートだけではなくレクチャーもある。またシューベルトが特集されていないとしても、1曲でもシューベルトや彼にまつわる曲が演奏されている番組もある。それらの数を月ごとにまとめたのが、以下の【表】である。ここからも明らかなように、シューベルトに関する番組数は、彼の命日のある11月を頂点としている。

【表】

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
5	1	3	5	7	9	9	10	6	9	35	11

シューベルトの曲が1曲か2曲、放送された番組の場合、歌曲など馴染みのある曲が演奏された。注目したいのは、シューベルトや彼の曲を中心に構成された番組である。そうした番組は、スタジオから放送されたものと中継放送されたものと大きく分けることができる。さらに中継放送された番組のなかには、3つの音楽祭——第10回ドイツ合唱同盟祭、ヴィーン市主催およびオーストリア連邦政府主催それぞれのシューベルト没後100年祭——のコンサート、それ以外のコンツェルトハウスや楽友協会などのコンサートに分けることができる。一方、スタジオから放送された番組は、演奏だけのもの、演奏の前に導入の説明を伴うもの、講演だけのものに分けることができる (例外として、11月18日の手紙や同時代の資料の朗読がある)。

11月にシューベルト関連の番組が多いのは、偶然ではない。『ラジオ・ヴィーン』の「RAVAGのシューベルト祭 Die Schubertfeier der “Ravag”」という記事では、11月に放送予定のシューベルトの番組が紹介されている (*Radio Wien* 9. 11. 1928: 81)。11月が突出していても、1月から10月にかけてもシューベルトや彼の曲を中心に構成された番組

がいくつもある。そこで、まず11月以前のそうした番組にどのようなものがあったかを見てみたい。

1月1日には、11時からマルティン・シュペール Martin Spörr 指揮のウィーン交響楽団でシューベルト・プログラムが放送された。演奏された曲は、劇付随音楽《ロザムンデ》から序曲とバレエ音楽、ヴァイオリンとオーケストラのための《コンツェルトシュティック》(ヴァイオリン: ヨーゼフ・ツィンブラー Josef Zimmler)、《岩の上の羊飼》(独唱: クララ・ムージル Klara Musil) (7)、交響曲第8番《グレート》である (*Radio Wien* 26. 12. 1927: 465)。このように劇音楽、協奏曲、声楽曲、交響曲という様々なジャンルを含んだ番組で、シューベルト没後100年が幕を開けた。

1月の中継放送では、1月5日にロゼー弦楽四重奏団ほかが出演した「シューベルト前夜祭 Schubert-Vorfeier」という楽友協会のコンサートがある。さらに1月22日には再び楽友協会から「シューベルト祭コンサート」として、フランツ・シャルク Franz Schalk 指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団ほかの演奏で《大ミサ曲》変ホ長調や《ミリアムの勝利の歌》が中継放送された。スタジオからの放送では、1月13日に「シューベルトの歌曲とその歌手」という番組でヴィルヘルム・ミュラーの詩による曲を放送した際には、カール・ラフィテ Carl Lafite がピアノ伴奏をするだけでなく、導入の解説も行った。さらにシューベルトの誕生日である1月31日に放送された「シューベルトの最初の成功」という番組では、シューベルト研究者オットー・エーリヒ・ドイチュ Otto Erich Deutsch の解説に続いて、室内楽曲や歌曲などが演奏された。1月1日の番組のみならず、1月全体を見ても、シューベルトの様々なジャンルが放送されただけでなく、ミュラーの詩による曲や最初の成功といったように明確なテーマをもった番組も放送された。

3月26日には、楽友協会ホールから「フランツ・シューベルト記念コンサート」が中継放送された。このコンサートのプログラムは、1828年3月26日にシューベルトが生涯で自ら企画した唯一のコンサートのものと同じであった。オーストリアの作家アントン・ヴィルトガンス Anton Wildgans が祝賀詩として書いた「プロローグ」が、エリカ・ヴァーグナー Erika Wagner によって朗読され、続いてコンサートが始まった。この詩では、シューベルトがウィーンの、とりわけ歌曲の作曲家であることを強調し、「われわれの時代の人」と位置づけ、生前よりも現在その作品と価値が評価されることが語られている (*Neue Freie Presse* 27. 3. 1928: 1-2)。

シューベルトに関連するテーマをもつ番組は中継放送にもあったが、そのほとんどが、スタジオからの放送に見られ、その際に演奏の前に導入の説明を伴うこともあった。5月10日「フランツ・シューベルトとウォルター・スコット」では、ドイチュが解説を行い、スコットの詩による歌曲などが演奏され、5月22日「シューベルトティアード」でラフィテが解説を行い、室内楽と歌曲が演奏された。また7月9日「青空の古典派時代から Aus der himmelblauen klassischen Musikepoche」という番組では、ジークフリート・レヴィ Siegfried Loewy の解説に続いて、モーツァルト的一幕オペラ《劇場支配人》、ベートーヴ

エンの《アデライーデ》、シューベルトの一幕オペラ《謀反人たち（家庭騒動）》が演奏された。つまり、オペラ作曲家としてのシューベルトが紹介された。

また講演だけのものとして、4月24日、27日、5月4日と3回に放送された「ウィーンのシューベルト縁の土地散歩 *Wanderung zu den Wiener Schubertstätten*」がある⁸⁾。午後6時から30分の番組で音楽批評家カール・コーバルト *Karl Kobald* がシューベルトの縁の土地を紹介するもので、『ラジオ・ウィーン』には当時の絵が掲載されている (23. 4. 1928: 30/II-III, 30.4. 1928: 31/IV)。

6月には、ウィーン市主催のシューベルト没後100年祭の第1部が開催された。この100年祭のコンサートから、6月6日の午後9時からヨーゼフ広場での「セレナーデ」が放送された。このコンサートでは、フランツ・シャルク *Franz Schalk* 指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とウィーン国立歌劇場合唱団が出演し、交響曲第4番「悲劇的」ほか管弦楽曲、無伴奏合唱曲《月光 *Mondschein*》や《夜の音楽 *Nachtmusik*》、オーケストラ伴奏合唱で《ロザムンデ》から幽霊の合唱や《魔法の竖琴》から精霊の合唱が歌われた。

7月には、第10回ドイツ合唱同盟祭からは2つのコンサートが放送された。ひとつは、開会の翌日の7月20日の合唱ホールで20時30分からの「第2メイン・コンサート（シューベルトへの敬意）2. *Hauptaufführung (Schubert-Ehrung)*」で、このコンサートではフリードリヒ・ジルヒャーが合唱に編曲した《菩提樹》ほかが歌われた。もうひとつは、7月22日のリングシュトラッセでのパレードに先駆けてブルク門前での「シューベルトへの敬意 *Schubert-Ehrung*」が放送された。いずれも祝祭感溢れる状況のなかでのシューベルトの有名曲が放送された。

8月から10月にかけてシューベルトに関連する主要な放送は2つである。ひとつは10月1日のスタジオからの連作歌曲《白鳥の歌》、もうひとつは10月19日のコンツェルトハウス大ホールでのロゼー弦楽四重奏団ほかによる八重奏曲と弦楽四重奏曲ト長調である。一方、シューベルトを中心とした番組ではないが、10月15日に「中央ヨーロッパ放送の枠」の「オーストリア音楽」という番組では、ハイドン、モーツァルト、ヨハン・シュトラウス親子の作品と並んで、シューベルトの《ロザムンデ》からバレエ音楽や《軍隊行進曲》ほか、スタジオからルドルフ・ニリウス *Rudolf Nilius* が指揮するウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で放送された。ベルリン、プラハ、ワルシャワ、ウィーンに向けたこの番組から、シューベルトはオーストリアの作曲家として位置づけられていたことが分かる。

1月から10月までのシューベルトに関連する番組では、馴染みのある曲に加えて、オペラ、劇音楽、交響曲、協奏曲、室内楽曲、声楽曲、宗教音楽と彼が創作した様々なジャンルが扱われた。そして時には明確なテーマに基づいた番組も放送されていた。ただし、ピアノ・ソナタは放送されていない。そのことはシューベルトのピアノ・ソナタは、当時、今日のようにピアニストにとって重要なレパートリーになっていなかったためだと考えられる (山口 2012: 145)。

2.3 RAVAG のシューベルト祭

すでに述べたように RAVAG は 11 月を「シューベルト祭」と位置付けていた。11 月 19 日がシューベルトの命日であり、ウィーン市主催とオーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭が両方とも開催されていた。この両音楽祭からの中継放送も含めて、RAVAG はシューベルトに関する番組を放送した（番組内容は本論文末の【表】を参照のこと）。

RAVAG のシューベルト祭は 11 月 1 日の連作歌曲《冬の旅》で幕を開けた。連作歌曲《美しき水車小屋の娘》は 11 月 24 日に放送され、10 月 1 日の《白鳥の歌》も含めて「三大歌曲集」が採り上げられた。また明確なテーマが設定された番組がいくつも放送された。まず、11 月 7 日、9 日、14 日、16 日に 4 回にわたる「フランツ・シューベルト、人と芸術家」がコーバルトの講演で放送された⁹⁾。また 11 月 15 日には音楽批評家パウル・シュテファン Paul Stefan が「シューベルト、伝説と実際」という番組で講演をしている。演奏を中心にした解説を伴う番組として、11 月 14 日の「シューベルトとその時代のダンス音楽」でフリッツ・ラング Fritz Lange が解説をしている。さらに演奏だけではあるけれども、シューベルトに関連するテーマが設定されている番組に、11 月 12 日（建国記念日）の「シューベルトから現代までのウィーン音楽」、11 月 15 日の「シューベルトの室内楽とゲーテ歌曲」、11 月 16 日の「シューベルトと友人たち」（歌曲中心とした番組）があった。

こうして 11 月 18 日を迎える。命日は 19 日であったが、日曜日である 11 月 18 日にもいくつものシューベルトの音楽の番組が放送された。まず午前 11 時から、コンツェルトハウス大ホールで行われているオーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭の式典が中継放送された。この式典ではミサ曲変イ長調 D678 からグローリアと《自然の中の神》が演奏され、その間には連邦大統領ハイニシュほか要人たちの演説が行われた。

ウィーン市主催のシューベルト没後 100 年祭からは 2 つのコンサートが放送された。ひとつは午後 5 時 30 分から市庁舎前広場で行われたウィーン労働者合唱同盟のコンサート、もうひとつは午後 7 時 30 分からコンツェルトハウス大ホールで行われたウィーン・シューベルト同盟の祝祭コンサートである。いずれも合唱を中心としたコンサートで、後者では《菩提樹》などが歌われた。このウィーン市主催の 2 つのコンサートの合間の 1 時間には、「フランツ・シューベルトの生涯と世界から」という番組で俳優のアルフレッド・ノイゲバウアー Alfred Neugebauer が、手紙や当時の資料の朗読がスタジオから放送された。

命日の 11 月 19 日には、シューベルトに関連する 3 つの番組があった。午後 3 時からウィーン市主催のシューベルト没後 100 年祭から彼の最後の家での式典に続き、午後 4 時 15 分からシューベルトが洗礼を受けたりヒテンタール教会（シューベルト教会）でのコンサート、午後 7 時 30 分からオーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭から楽友協会大ホールで行われているウィーン男声合唱協会のコンサートである。

このように 11 月 18 日および 19 日にはオーストリア連邦政府主催およびヴィーン市主催の両方のシューベルト祭の様子が放送された。18 日と 19 日にシューベルト没後 100 年祭はピークに達したが、その後もシューベルトに関する番組が放送された。11 月 20 日にはルドルフ・ニリウス指揮のヴィーン・フィルハーモニー管弦楽団で交響曲第 7 番「未完成」や交響曲第 8 番「グレイト」ほか、続いて 22 日にはオーストリア連邦政府主催のシューベルト没後 100 年祭の公演であるヴィーン国立歌劇場でのロベルト・ヘーガー Robert Heger 指揮のオペラ《家庭の戦争》および《双子の兄弟》ほか放送された。こうした大規模な作品に加えて、11 月 23 日には「未知のシューベルト」という番組では、歌曲が演奏され、さらに 11 月 29 日には「子どものための音楽の時間（シューベルト祭）」という番組では《菩提樹》《野ばら》《ます》といった有名曲が演奏された。

RAVAG のシューベルト祭は、11 月 18 日と 19 日の 2 つのシューベルト没後 100 祭の中継放送を軸にしつつも、シューベルトに関する講演、連作歌曲、交響曲、オペラに加えて、歌曲にしてもテーマを設定した番組も放送した。つまり、1 月から 10 月までと同様にシューベルトとその音楽を歌曲に限定するのではなく、ピアノ・ソナタは除くものの、彼の創作全体を伝えていくという方針がみられた。なお、12 月には、シューベルトや彼の曲を中心に構成された番組はない。

1927 年に RAVAG がヴィーン市内にある主要なコンサートホールや歌劇場から中継放送できることになったことが、シューベルト没後 100 年の番組の充実につながったことは言うまでもない。一方、ベートーヴェン没後 100 年祭で命日の 26 日がヴィーンからヨーロッパ各国に放送され、中央ヨーロッパ放送の始まりであったのに対して、シューベルト没後 100 年祭は汎ヨーロッパ放送の始まりであった (Ergert 1971: 102-103)。11 月 18 日午前 11 時からのオーストリア連邦政府主催のコンツェルトハウス大ホールでの式典は、オーストリアだけではなく、ドイツ、ポーランド、フランス、ブリュッセル (ベルギー)、ロンドン (イギリス)、ユーゴスラヴィア、チェコスロヴァキアにも放送され、その聴取者数は 500 万人になると、当日の『新ヴィーン日報』で報じられている (*Neues Wiener Tagblatt* 18. 11. 1928: 5)。この放送は、『ラジオ・ヴィーン』では次のように述べられている。

シューベルト 100 年は終わった。初めて大陸諸国が統一され、全ヨーロッパが祭に参加した。なぜなら、18 日のオーストリア連邦政府の式典が行われたコンツェルトハウスの大ホールでの声と音楽のあらゆる音が、ラジオによって世界に放送されたからである。

〔中略〕西ヨーロッパと中央ヨーロッパすべてが会場になった。何百万人が、日曜午前中に、偉大な天才シューベルト、ヴィーン市の偉大な息子に熱中した。(*Radio Wien* 30. 11. 1928: 137)

このようにヨーロッパ各地に放送された、シューベルト没後 100 年祭は、ヨーロッパの放

送史において重要な意味をもち、次のような言葉で締めくくられている。

1928年11月18日は、永久にラジオ放送の記憶に値する日となるであろう。なぜならば、われわれの人気のあるオーストリアの音楽の巨匠の命日の100年祭が、汎ヨーロッパ・ラジオ放送の誕生を同時に意味するからである。電線の蛇行線によって初めて音と言葉が電光石火に広まり、45の放送局のアンテナから楽しい知らせとして、すなわち相互の敬意と理解の新しい時代の知らせとして突然現れた時、汎ヨーロッパ・ラジオ放送は世界にもたらされた。(Radio Wien 30. 11. 1928: 137)

つまり、シューベルト没後100年はドイツ・ナショナリズムでも、ドイツと対等に位置するオーストリアでもなく、ヨーロッパの「相互の尊敬と理解の新しい時代」と結びつけられている。このような言説から、RAVAGがシューベルトの創作全体を伝える番組を放送していたのは、ドイツ・ナショナリズムとの結び付きの色濃い歌曲作曲家としてシューベルトのイメージを払拭しようとしていたからだと考えられる。

結び

1928年シューベルト没後100年に、ウィーンでは3つの音楽祭が開催された。第10回ドイツ合唱同盟祭がドイツ・ナショナリズムと密接に結び付き、そのなかでシューベルトは位置づけられていた。社会民主党が政権を担うウィーン市主催のシューベルト没後100年祭では、合唱曲を中心に据えているため、ドイツ合唱同盟祭と同じ傾向にあった。一方、キリスト教社会党が政権を担うオーストリア連邦政府主催のシューベルト100年祭では、合唱曲以外のジャンルも扱い、シューベルトがドイツとならぶオーストリアの国の大作曲家として位置づけられていた。

RAVAGでのシューベルトに関連する番組には、シューベルトが作曲したジャンルを幅広く扱うだけでなく、テーマを設定した番組、伝記的な内容を扱った講演もあり、一貫してシューベルト創作全体を紹介しようとしている。そうした枠組みのなかに政治的な意図をもつ3つの音楽祭も組み入れている。ただしラジオ放送のなかでは、いずれの政治的な意図に偏ることなく対等に扱っている。とりわけ11月18日と19日のラジオ放送は、ウィーン市とオーストリア連邦政府とが別々に開催していたシューベルト没後100年祭をひとつにまとめあげたと言える。そしてRAVAGは、11月18日の番組を西ヨーロッパと中央ヨーロッパ各国に放送することで、シューベルト没後100年をヨーロッパの「相互の尊敬と理解の新しい時代」と結びつけた。従って、RAVAGの放送によって、シューベルトはヨーロッパ各国の調和の象徴としての役割を担うことになったのである。

注

(1) 第10回ドイツ合唱同盟祭は、「偉大なドイツ歌曲王 *Liederfürst* であり男声合唱作曲家であるフランツ・シューベルト」を祝うものであった (*Offizielles Erinnerungsalbum an das 10. Deutsche Sängerbundesfest Wien 1928*: IX)。

(2) RAVAG は、Radio-Verkehrs-Aktien-Gesellschaft の略で、直訳すると「ラジオ通信株式会社」となる。

(3) 7月23日付の『*Neue Freie Presse*』によれば、整備のために、警察官 5000 人、警備員 9000 人、軍人 1500 人が配備され、観客 70 万人が、20 万人参加したパレードを見物した (23. 7. 1928: 4) とあるが、同日の『*Neues Wiener Journal*』によれば、20 万人の参加者と 100 万人の観客である (*Neues Wiener Journal* 23. 7. 1928: 2)。

(4) エアガートは、音楽監督をアストとしているが (Ergert 1974:45)、シルヴィンクは放送開始当初から多くの番組で演奏しているため、本論文では『オーストリア音楽事典 *Oesterreichisches Musiklexikon*』での記述に従った (Harrndt 2002: 63; Festl 2006: 2018)。

(5) 1925 年 7 月 6 日からグラーツ・プログラムも放送されるようになる (*Radio Wien* 5. 7. 1925: 8, 13)。基本的にはヴィーンと同じであるが、グラーツ独自の番組もある。本論文では、ラジオ・ヴィーンのみを対象とする。

(6) フェリックス・ワインガルトナー Felix Weingartner 指揮のヴィーン交響楽団と楽友協会合唱団で《皇帝ヨーゼフ 2 世の死を悼むカンタータ》と《合唱幻想曲》が演奏された。ソリストは前者がゲルトルーデ・フェルシュテル Gertrude Förstel (ソプラノ)、エミリエル・チュカ Emilie Rutschka (アルト)、ヘルマン・ガロス Hermann Gallos (テノール)、リヒャルト・マイアー Richard Mayr (バス)、後者がフランツ・シュミット Franz Schmidt であった (*Neue Freie Presse* 27. 3. 1927: 12)。

(7) 《岩の上の羊飼》は、声楽、クラリネットとピアノのための作品であるが、編曲者は記されていないものの、ピアノの代わりにオーケストラ編曲版で演奏されたと考えられる。

(8) 4 回予定されていたが (*Radio Wien* 23. 4. 1928: 1040)、3 回しか放送されていない。

(9) 関連する図版が『ラジオ・ヴィーン』に掲載された (2. 11. 1928: 5/II-III)。

【表】

放送年月日	曜日	開始時間	番組名	演奏者・出演者名	曲名	Radio Wien (掲載号)	
1928/11/1	Do	19:30	Franz Schubert: Liederzyklus: "Die Winterreise"	Hans Duhan, Kammer Sänger Erich Meller, Klavier	Liederzyklus "Winterreise"	1928/10/26	
1928/11/3	Sa	18:10	Kammermusik	Edgar Schiffmann, Klavier Christa Richter, Violine	Variationen über d. Thema "Trockne Blumen"	1928/10/26	
1928/11/5	Mo	11:00	Vormittagsmusik	Quartett Dr. Ph. de la Cerdá	Militärmarsch, op.51 Nr.1	1928/11/2	
1928/11/7	Mi	18:15	Franz Schubert, der Mensch und Künstler I	Karl Kobald		1928/11/2	
1928/11/9	Fr	17:25	Lieder	Otto Fillmar, Bariton Otto Schulhof, Klavier	Romanze	1928/11/2	
					Rosamunde	1928/11/2	
					Fischerweise	1928/11/2	
					Der blinde Knabe	1928/11/2	
					Verklärung	1928/11/2	
					Vor meiner Wiege	1928/11/2	
					Widerschein	1928/11/2	
					Der Musensohn	1928/11/2	
					Phantasie für Violine und Klavier	1928/11/2	
					18:30	Franz Schubert, der Mensch und Künstler II.	Karl Kobald
1928/11/10	Sa	16:00	Nachmittagskonzert des Wiener Konzertorchesters Ludwig Werba	Wiener Konzertorchester Ludwig Werba, Dirigent	Ständchen	1928/11/2	
		19:30	Übertragung aus dem großen Musikvereinsaal Violinabend Joseph Szigeti	Joseph Szigeti, Violine Boris Golschmann, Klavier	Soatine, D-dur	1928/11/2	
1928/11/12	Mo	16:00	Nachmittagskonzert "Wiener Musik von Schubert bis Gegenwart"	Des Wiener Konzertorchester Josef Holzer, Dirigent	Der vierjährige Posten, Ouvertüre	1928/11/9	
1928/11/14	Mi	18:25	Franz Schubert, der Mensch und Künstler III.	Karl Kobald		1928/11/9	
		20:05	Schubert und die Tanzmusik seiner Zeit. Karl Tautenhayn, Musikalische Einrichtung	Das Tautenhaynquartett Otto Schulhof, Klavier Alfons Grünberg, Violine Josef Niedermayer, Flöte Adolf Dürer, Kontrabass	Einleitender und verbindender Vortrag (Fritz Lange) Im Rahmen der zeitgenössischen Tanzkompositionen gelangen auch zwei unbekannt und ungedruckte Jugendwerke Josef Lanners, die Walzerserie "Die Jahreszeiten" für zwei Geigen, Flöte und Gitarre und "Solo-Ländler für Giegeund Gitarre ersten Aufführung im Radio-Wien	1928/11/9	
1928/11/15	Do	11:00	Konzert des Wiener Konzertorchesters André Hummer	Wiener Konzertorchester André Hummer, Dirigent	Am Meer	1928/11/9	
		18:30	Schubert, Legende und Wirklichkeit	Paul Stefan		1928/11/9	
		19:00	Kammermusik und Goethelieder von F. Schubert	Anton Tausche, Konzertsänger Erich Meller, Klavier	Sedlak-Winkler Quartett	Strichquartett Es-dur, op. 125	1928/11/9
					Wanderers Nachtlied	1928/11/9	
					Geheimes	1928/11/9	
					Schwager Kronos	1928/11/9	
					Ganymed	1928/11/9	
An den Mond	1928/11/9						
Grenzen der Menschheit	1928/11/9						
Der Fischer	1928/11/9						

1928/11/16	Fr	18:30	Franz Schubert, der Mensch und Künstler IV	Karl Kobald		1928/11/9
		20:05	"Schubert und Freunde"	Viktor Heim, Konzertsänger Carl Lafite, Klavier	An die Leier	1928/11/9
					Der Jüngling und der Tod	1928/11/9
					Litanei	1928/11/9
					Rondo brillant, h-moll	1928/11/9
					Der Sieg	1928/11/9
					Schlummerlied	1928/11/9
				Beim Winde	1928/11/9	
				Anita Ast, Violine Carl Lafite, Klavier	Sonate, a-moll	1928/11/9
Viktor Heim, Konzertsänger Carl Lafite, Klavier	Vor meiner Wiege	1928/11/9				
Liebeslauschen	1928/11/9					
Fischerweise	1928/11/9					
1928/11/17	Sa	19:00	Sonatenabend	Wilhelm Winkler, Cello Stella Wang, Klavier	Arpeggione-Sonate	1928/11/9
1928/11/18	So	11:00	Übertragung aus dem großen Konzerthausaal (Festakt anlässlich der Schubert-Zentenarfeier der österreichischen Bundesregierung)	Wiener Singakademie Singverein der Gesellschaft der Musikfreunde Paul von Klenau, Dirigent Wiener Symphonieorchester	"Gloria" aus der As-dur-Messe	1928/11/9
					Festreden	1928/11/9
				Wiener Singakademie Singverein der Gesellschaft der Musikfreunde Robert Heger, Dirigent Wiener Symphonieorchester	Hymnus für Chor und Orchester "Gott in der Natur"	1928/11/9
		17:30	Übertragung vom Rathausurm: Chorkonzert des Arbeitersängerbundes "Gau-Wien" und der Fanfaren (Im Rahmen der Schubert-Zentenarfeier der Gemeinde Wien)		Im Rahmen der Schubert-Zentenarfeier der Stadt Wien	1928/11/9
		18:30	Aus Franz Schuberts Leben und Welt	Alfred Neugebauer		1928/11/9
		19:30	Übertragung aus dem großen Konzerthausaal: Festkonzert des Wiener Schubertbundes	Josephine Stransky Paul Weingarten Franz Schütz Viktor Keldorfer, Dirigent	"Der Wintertag", Männerchor mit Klavierbegleitung	1928/11/9
					"Ruhe schönsten Glück der Erde", Männerchor a capella	1928/11/9
					"Nachtgesang im Walde", Männerchor mit Hörnerbegleitung (Bläser: Stiegler-Quartett d. staatsoper, Wien)	1928/11/9
Liedervorträge (Josephine Stransky)	1928/11/9					
"Mondenschein", Männerchor a capella	1928/11/9					
"Salve Regina", Männerchor a capella	1928/11/9					
"Jagdlied", Männerchor mit Hörnerbegleitung	1928/11/9					
Klaviervorträge (Paul Weingarten)	1928/11/9					
"Der Lindenbaum", Männerchor	1928/11/9					
"Die kleine Schäferin" (La Pastorella), Männerchor mit Klavierbegleitung	1928/11/9					
"Gott in der Natur" Männerchor mit Klavier- und Orgelbeglgt.	1928/11/9					

1928/11/19	Mo	11:00	Vormittagsmusik	Quartett Dr. Ph. De la Cerda	Militärmarsch, op. 51, Nr. 1	1928/11/16	
					Zwei Lieder	1928/11/16	
					II. Moment Musical	1928/11/16	
					Violinsonate, op. 137, Nr. 3 (Violinsolo: Stefan Fraisl)	1928/11/16	
		15:00	Übertragung des Festakts im Sterbehaus Schuberts (Franz Schubert gest. 19. November 1828, 3 Uhr nachmittags)	Georg Reimers, , Sprecher	Nachruf von Franz von Schober, dem treuesten Freund des Meisters	1928/11/16	
					Albert Messany	"Todesmusik" Lied mit Klavierbegleitung,	1928/11/16
					Das Weißgärber-Mayr Quartett	Andante con Moto, aus dem Streichquartett d-moll "Der Tod und das Mädchen"	1928/11/16
					Ferdinand Soeser (Vorstand des Wiener Schubertbundes, Schulrat), Sprecher	Gedächtnisworte	1928/11/16
					Kamerchor des Wiener Schubertbundes Viktor Keldorfer, Dirigent	"Das Grab", Männerchor	1928/11/16
		16:15	Dem Andenken Franz Schuberts. Übertragung aus der Lichtentaler Kirche	Heinrich Singer	Glockengeläute	1928/11/16	
					Orgelvorspiel	1928/11/16	
					Chor der Lichtentaler Kirche Heinrich Singer, Dirigent	Chorvorträge: Litanej	1928/11/16
					Chor der Lichtentaler Kirche Heinrich Singer, Dirigent	23. Psalm	1928/11/16
		18:15	Die Franz Schubert-Gedächtnisstiftung	Wilhelm Kienzl		1928/11/16	
		19:30	Übertragung aus dem großen Musikvereinssaal: Festkonzert des Wiener Männergesangsvereines. "Franz Schubert"	Karl Luze, Dirigent Ferdinand Großmann, Dirigent Staatsopernsängerin Lilli Claus, Viktor Polatschek, Klarinette Friedrich Wührer, Klavier Ein Streichorchester des Wiener Staatsopernorchesters Georg Valker, Klavierbegleitung der Chöre Fritz Loewenrosen, Klavierbegleitung der Chöre	Gesang der Geister über den Wassern (mit Beileitung Wiener Philharmoniker)	1928/11/16	
					Der Hirt auf dem Felsen (mit Sopransolo)	1928/11/16	
					Das Dörfchen	1928/11/16	
					Der Gondelfahrer	1928/11/16	
					Im Gegenwärtigen Vergangenes	1928/11/16	
					Klavervorträge (Prof. Wührer): Impromptu, G-dur, op. 80	1928/11/16	
					Klavervorträge (Prof. Wührer): Menuett, h-moll, op. 78	1928/11/16	
					Klavervorträge (Prof. Wührer): Impromptu, As-dur, op. 142	1928/11/16	
Klavervorträge (Prof. Wührer): Impromptu, f-moll, op. 142	1928/11/16						
Nur wer die Sehnsucht kennt	1928/11/16						
Nachtheile (mit Tenorsolo)	1928/11/16						
Salve Regina	1928/11/16						
Flucht	1928/11/16						
Abendkonzert des Wiener Konzertorchesters J. W. Gangelberger	Wiener Konzertorchester J. W. Gangelberge, Dirigent				Militärmarsch	1928/11/16	
		Ouvertüre zur Oper "Die Zauberharfe" (Rosamunde)	1928/11/16				
		a) Deutsche Tänze (Karl Pauspertl) b) Am Meer (Karl Pauspertl)	1928/11/16				
1928/11/20	Di	20:05	Konzert d. Wiener Philharmoniker. "Franz Schubert"	Wiener Philharmoniker Rudolf Nilius, Dirigent	Trauermarsch, op. 55	1928/11/16	
					h-moll-Symphonie (unvollendete)	1928/11/16	
					Symphonie Nr. VII, C-dur	1928/11/16	

1928/11/22	Do	19:30	Übertragung aus der Wiener Staatsoper. Festvorstellung [Schubertfeier der Bundesregierung]	Robert Heger, Dirigent	Der häusliche Krieg	1928/11/16
					Ballettmusik "Rosamunde"	1928/11/16
					Die Zwillingbrüder	1928/11/16
1928/11/23	Fr	20:00	Der unbekannte Schubert	Franz Steiner, Kammer Sänger Erich Meller, Klavier	An den Tod	1928/11/16
					Nachtstück	1928/11/16
					Im Freien	1928/11/16
					Der Jüngling und der Tod	1928/11/16
					Prometheus	1928/11/16
					Der Atlas	1928/11/16
Die Sterne	1928/11/16					
1928/11/24	Sa	17:30	Kammerabend	Das Gottesmann-Quartett Otto Stix, Kontrabass Otto Schulhof, Klavier	Forllenquintett	1928/11/16
		19:10	F. Schubert: Liederzyklus "Die schöne Müllerin"	Hans Duhan, Kammer Sänger Erich Meller, Klavier	"Die schöne Müllerin" (Das Wandern, Wohin?, Halt!, Danksagung an den Bach, Am Feierabend, Der Neugierige, Ungeduld, Morgengruß, Des Müllers Blumen, Tränenregen, Meint!, Pause, Mit dem grünen Lantensbande, Der Jäger, Eifersucht und Stolz, Die liebe Farbe, Die böse Farbe, Trockne Blumen, Der Müller und der Bach, Des Baches Wiegenlied	1928/11/16
1928/11/25	So	16:00	Nachmittagskonzert des Wiener Konzertorchesters Josef Holzer	Wiener Konzertorchester Josef Holzer, Dirigent	Ave Maria (F. Pfandler, Flügelhorn-Solo)	1928/11/16
		19:35	Goethe in der Lied-Komposition	Andreas Weissenböck, Erläuternder Vortrag Annemarie Lischke, Konzertsängerin Hermine Lischke, Klavier	Erster Verlust	1928/11/16
1928/11/29	Do	17:15	Musikstunde für Kinder (Schubertfeier)	Marianne Kurada, Mitwirkend: Marianne Mislap-Kapper		1928/11/23

【参考文献】

- Eder, Gabriele Johanna. 1991. *Wiener Musikfeste: Zwischen 1918 und 1938 ein Beitrag zur Vergangenheitswältigung*. Vienna, Salzburg: Geyer Edition.
- Ergert, Viktor. 1974. *50 Jahre Rundfunk in Österreich. Band I: 1924-1945*. Vienna: Residenz Verlag.
- Fastl, Christian. 2006. "Silving, Bert." In *Oesterreichisches Musiklexikon*, Vol.5. 2006: 2218-2219.
1928. *Festführer für das 10. Deutsche Sängerbundesfest Wien 19. bis 23. Juli 1928*. Vienna: R. Lechner.
- Loos, Helmut. 2000. "Franz Schubert im Repertoire der deutschen Männergesangsvereine: Ein Beitrag zur Rezeptionsgeschichte." *Archiv für Musikwissenschaft* 57/2 : 113-129.
1928. *Offizielles Erinnerungsalbum an das 10. Deutsche Sängerbundesfest Wien 1928*. Wien: R. Lechner.
- Haas, Robert and Alfred Orel. 1929. "Vorwort." In *Bericht über den Internationalen Kongress für Schubertforschung. Wien 25. bis 29. November 1928*, XI-XII. Augsburg: Dr. Benno Filser Verlag.
- Harrndt, Andrea. 2002. "Ast, Max." In *Oesterreichisches Musiklexikon*, Vol.1. 2002: 63.
- Permoser, Manfred. 2014. "Deutscher Liederfürst und Phäake vom Donaustrom: Das Schubert-Gedenkjahr 1928 im Kontext divergierender Erinnerungskultur." In *Musik und Erinnern: Festschrift für Cornelia Szabó-Knotik*, edited by Christian Glanz and Anit Mayer-Hirzberger. 77-92. Vienna: Hollitzer.
- Saary, Margareta. 2005. "Radio-Verkehrs-Aktien-Gesellschaft (RAVAG)." In *Oesterreichisches Musiklexikon*, Vol.4. 2004: 1198-1199.
- 山口真季子 2012 「E. クルシェネクによるシューベルトのハ長調ソナタ D 八四〇補完 : ベルリン・サークルにおけるシューベルト解釈」『美学』第 63 巻第 1 号 : 145-156。
- . 2014 「ウィーンにおけるシューベルト没後 100 年祭 (1928) ——シューベルトのドイツ性とオーストリア性をめぐって」『阪大音楽学報』第 12 号 : 19-35。

【定期刊行物】

- Neue Freie Presse*.
- Neues Wiener Journal*.
- Neues Wiener Tagblatt*.
- Radio Wien*.
- Wiener Zeitung*.

*本論文は、JSPS 科研費 JP26370188 による研究成果の一部である。

【論 文】

『ドイツ伝説集』における「子ども」をめぐる怪異

植 朗子

1. はじめに

伝説 Sage は、その内容を「事実」として語り継ぐことを目的とする文学の形式である。伝説は、もともと民間伝承のジャンルのひとつで、19 世紀にドイツ民俗学の基礎を作り上げたグリム兄弟 Brüder Grimm が、そのさきがけともいえる『ドイツ伝説集』 *Deutsche Sagen*⁽¹⁾ を編纂している。そして、グリム兄弟はこの伝説集より先に、1812 年に『子どもと家庭の童話集』 *Kinder- und Hausmärchen* (『グリム童話集』)⁽²⁾ を発表している。

伝説に対してメルヒェン Märchen は、同じ民間伝承の形式のひとつでありながらも、事実性を排除し、どこの誰とは特定できない人物が、特定できない場所で、架空の出来事を繰り広げる。そのため、メルヒェンは空想的で、「読み物」としての美しさに満ちているといわれている。グリム兄弟は、「子どものための読み物」としての特性を意識しながら、『グリム童話集』の改版を続けた。一方で、『グリム童話集』と関連する「子どもにまつわる怪異」のモチーフを伝説集の中にも収録した。伝説に含まれる「事実」には、どのような意味が込められているのか。「事実」という前提のもとで怪異を語るのはなぜなのか。

ここでまず、『ドイツ伝説集』にみられる「事実」の記載されている箇所を引用して示す。伝説の内容が特異な出来事であったとしても、登場人物や、怪異の起こった場所、日時などが史実のように語られる場合、その不思議な出来事は、「本当にあった出来事」として記録される。

1520 年頃、スイスのバーゼルにレオンハルトという名の男がいた。この男は、ふだんはリーニマンと呼ばれていて、仕立屋の息子であったが、彼は子どもっぽく単純な性格で、吃り気味のためにうまく話ができなかった。

「蛇娘」(『ドイツ伝説集』第 13 話)⁽³⁾

1644 年 8 月 18 日、選帝侯ヨハン・ゲオルク 1 世はケムニッツの町を通りすぎた。

「戦争と平和」(『ドイツ伝説集』第 168 話)⁽⁴⁾

このように、①具体的な日付、②実在する地名、③歴史的な記録が残っている人物の具体的な名前などがそれにあたる。その他にも、たとえば、名前が挙げられながらも、その人物が史実や公的な記録に残るような著名人でない場合は、職業や性格、あるいは年齢や親の名前などの詳細が記されることによって、実在性が強調される。日本の「説話」にお

いても、同様の表記が見られ、これらは創作物語やいわゆる童話とは異なる伝説・説話固有の特色といえる。『グリム童話集』の登場人物や、メルヒェンの舞台となっている土地の説明は、以下のように表現されている。

むかし昔、あるところに1羽の雌鶏と雄鶏がいました。雌鶏と雄鶏は一緒に旅にでることにしました。そこで、雄鶏は4つの赤い車輪のすてきな車をこしらえて、それを4匹のハツカネズミにひかせました。

「コルベスさま」(『グリム童話集』第41話)⁽⁵⁾

伝説の表記と比較するとその違いは明らかで、メルヒェンでは出来事が起こった日付が具体的に示されることもなければ、その場所の名称や、舞台となっている土地の地理上の説明も一切ない。「コルベスさま」や「ハンス」といった人物名が記されていることはあるが、それが実在する人物なのか、どういった家系なのかなどの詳細は省かれている。登場人物に関する情報は、せいぜい職業や性格などにとどまっている。そして、登場人物たちは、この世とは隔絶された不思議な場所で、ありえないほどの金銀財宝や珍しい道具を手にし、言葉を操る動物たちや精霊に出会って、奇妙な体験をする。メルヒェンとはそういう世界観の上に成り立っている。しかし、一方で伝説は、その話の読み手・聞き手である一般の人々となんら変わらない平凡な人間が、日常の中で、怪異に取り込まれる。

本論では、事件に巻き込まれる人物、あるいは奇妙な出来事を目撃者となる人物のモチーフとして、「子ども」を例にとり、その話型を分析する。次章からは、「子ども」のモチーフを含む伝説を抽出し、伝説分類と話型を手がかりに、「子ども」のモチーフの型を整理する。

2. 土地伝説集における「子ども」のモチーフの型

『ドイツ伝説集』下巻の歴史伝説集には、ドイツ語圏の土地と関係の深い諸民族の伝承や、起源説話、英雄伝説が収められているが、土地伝説集にはドイツ語圏に様々な地域に出没する怪異が多く記録されている。本論文では、「子ども」の生死、ならびに「子ども」をめぐる不思議について、実際にあった事件・本当の出来事だと信じられてきた話を取り上げるため、とくに土地伝説集に収録されている話に着目する。グリムの土地伝説集に収められているさまざまな伝説は、近代以前の記録から採話されているため、今以上に子どもは大人よりも「死」に近い存在だった。子どもを異界に連れ去る魔物、子どもが日常生活の中で遭遇する霊的存在、子どもを守る精霊などの民間伝承には、数多くのバリエーションが存在する。

『ドイツ伝説集』の土地伝説集362話中、「子ども」のモチーフを含むものは57話である。土地伝説集において、これほど怪異や不思議の目撃者となる人物のモチーフは他

にはない。ここで、伝説集の収録順に、DS (*Deutsche Sagen*) 番号 1 から 362 をうち、それぞれの内容ごとにまとめる。子どもと怪異との関わりから、タイプを A~E の 5 種類に分け、伝説番号順に示すこととする。なお、以下に記したモチーフ分類は、既存の研究によって整理されているものではない。もともと先行研究においては、『ドイツ伝説集』の伝説配列は無作為であると考えられており、伝説の分類、タイプ分けなどは行われていなかったため^⑥、本論では「子ども」のモチーフを含むものを伝説グループと話型から整理した。そして、タイプ A~E には、それぞれの特徴についてのまとめを付している。

.....

【タイプ A : 子宝をもたらす怪異体^⑦、子どもを助ける怪異体】

- DS4 : 子どもの守り神である「ホッラさん」の伝承
- DS7 : 子どもの守り神である「ホッラさん」の伝承
- DS50 : 子どもにパンを与える「荒女」の伝承
- DS76 : 子どもを優しく揺する「女の守り神」
- DS83 : 子どもや若者の死骸からできる「アルラウネ」、子宝をもたらす、家の守り
- DS87 : 「麦女」による取り替えっ子 ※産後まもない女を休ませる
- DS107 : 特別なゆりかごで育った子どもの特殊な能力 (宝発見)
- DS157 : 宝を発見した 2 人の子ども
- DS158 : 宝を発見した若者
- DS159 : 宝を発見した幼い娘
- DS230 : キリストによって救済された、父に呪われた子
- DS232 : 神よって火災から救済された赤ん坊
- DS267 : 子どもの守り神である「白い夫人」(祖先)、ペルヒタの伝承
- DS268 : 子どもの守り神であるペルヒタの伝承
- DS361 : 神の使いによって食事を与えられ救済された少年
- * 子どもを守り、救済する異界の存在は、「人型」の姿で現れる神的存在が多く、ドイツ語圏の神話あるいはキリスト教的伝承から派生したものがある。

.....

【タイプ B : 取り替えっ子、子どもに悪戯をする怪異体、子どもを連れ去る怪異体】

- DS4 : 子どもの守り神である「ホッラさん」が子に罰を与える伝承 ※タイプ A と重複
- DS44 : 「こびと」に棲家の提供をもとめられる子ども
- DS50 : 子どもを連れ去る「荒女」の伝承 ※タイプ A と重複
- DS60 : 「水妖」による取り替えっ子
- DS80 : 「夢魔」による赤ん坊のオムツへの悪戯
- DS81 : 「悪魔」による取り替えっ子

DS82：川の中の「悪魔」による取り替えっ子

DS87：「悪魔」による取り替えっ子

DS88：「悪魔」による取り替えっ子

DS87：「麦女」による取り替えっ子 ※タイプ A と重複

DS106：失踪する子ども

DS146：子どもを連れ去る「先祖の霊」の伝承

DS244：ハーメルンの笛吹き男、失踪する子ども

DS268：子どもの守り神である「ペルヒタ」が子どもを罰する伝承 ※タイプ A と重複

DS276：子どもを罰する「鬼火」伝承

* 子どもを連れ去る＝子どもの死を暗示させる伝承である。ドイツ語圏の民間伝承では、キリスト教化以前の民間信仰の名残から、古代ゲルマンの神々が零落した姿として、守護者としての能力を発揮する精霊の伝説と、さらにそれが魔物化して語られる伝説がある。それぞれに結末のパターンとしての話型が異なるため、怪異体に守護者としての性格が保持されているものはタイプ A に、魔物化の側面が強いものはタイプ B に分類した。

.....

【タイプ C：死亡する子ども】

DS54：水の霊に溺死させられた子ども

DS62：水の霊に人身御供にされる子ども

DS97：無実の罪で殺害された人物の呪いを受けた子ども（ガラスの目、鹿の足）

DS223：幽霊の頼みを断って死亡した少年

DS224：水死後に救済された子ども

DS237：死亡後にパンの靴を履かされ幽霊になった子ども

DS242：パンの取り合いで死亡した子ども

DS243：橋から落下して水死した子ども

DS250：誘拐され殺害された子どもを料理し、飢饉を呼ぶ伝承

DS260：無実の罪で殺害された人物の呪いを受けた子ども

DS261：幽霊の姿が見えて死ぬ子ども

DS266：子どもの死を知らせる鐘

DS305：水死した少女

DS352：ユダヤ人に殺害された子ども

DS353：ユダヤ人に殺害された子ども

* 近代以前の子どもの死の原因について、史実と関連させて継承された伝説。事件性があるものが多く、「子どもを死に迫いやるもの」として恐れられていた怪異や、原因が不明な事故に関する内容を収録した話型。

.....

【タイプ D：人間の子どもの姿の怪異体】

DS14：豊作と飢饉を予言する幼児の姿の怪異体

DS46：森に住む 2 人の子どもの姿の怪異体

DS71：殺された子どもの霊が「コーボルト」という「家霊」になる、家の守り

DS75：4 歳くらいの子どもの姿の「家霊」、家の守り

DS145：飢饉を予言する幼児の姿の怪異体

DS305：水死した少女の父親を水底へ連れて行く 2 人の男の子

* 子ども自体が怪異体に転じている話型。大人よりも「死に近いもの」として考えられていた「子ども」は、死後、怪異体になって周囲の人々を目撃されることがあり、それらの伝説の型のすべてを抜き出した。

.....

【タイプ E：魔物の子ども】

DS34：お腹を空かせ人間にパンを求める「こびと」の子ども

DS41：難産の「こびと」が人間に助けを求める→お礼に金と家の守り

DS49：難産の「水妖」が人間に助けを求める→お礼にお金

DS58：難産の「水妖」が人間に助けを求める→お礼の品物

DS65：難産の「水妖」が人間に助けを求める→お礼の品物

DS66：難産の「水妖」が人間に助けを求める→途中で産婆が逃げ出す

DS68：難産の「水妖」が人間に助けを求める→お礼に家の守り

DS69：難産の「水妖」が人間に助けを求める→お礼に金と家の守り

* 「人間の子ども」ではなく、「怪異体の子ども」に人間が関わってしまった話。「怪異体の子ども」の誕生や食事（成長）にまつわる内容。タイプ D と共通要素があるが、タイプ E の話型では、「怪異体の子ども」は庇護される存在で、その子ども自体が人間に悪さをするのではなく、その親にあたる存在が人間に何らかの行為を行う。

.....

ここまで 5 つのパターンにそって、『ドイツ伝説集』に登場する「子ども」のモチーフをその特性ごとに分けたところ、短い伝説であっても、それぞれのタイプに重複するものがみられた。内容や話型の重複は、収録されている 362 話の伝説が互いに関連し合っていることを示しており、①怪異体の外見的特徴、②怪異体の起源、③人間への行為。関わり方、④怪異が起こった場所、⑤話の結末など、共通点を持っている伝説同士が、同じグループに属しているためである。次は、A から E のタイプ別にモチーフの話型と特徴についてさらに詳しく論じる。

3. 「子ども」伝説の型と関連するモチーフ

① 出産・家の守り

前述の 5 つのタイプのうち、話型に一定の統一性がみられるのは、【タイプ E：魔物の子ども】である。これは人間の子どもではなく、魔物や怪異体の子であるため、いわゆる人間の「子ども」のモチーフとは異なる。しかし、このような「魔物の子ども」の伝説は、一様に「人間に助けを求める」話型となっており、「子ども」という存在が庇護すべき、あるいは助けを求める存在として描かれていることがわかる。「人間の子ども」と同様に、「魔物の子ども」も周囲の人間たちによって守られるべきか弱いものとして解釈されている点が興味深い。【タイプ D】の「人間の子どもの姿の怪異体」とも類似点があり、「子ども」というモチーフそのものが、異界との接点であることがうかがえる。「死にやすい」ということは、異界へ侵入しやすい存在、怪異体と遭遇しやすい一種の霊的存在であると考えられたものと思われる。

【タイプ E】の話型においては、魔物が求めている具体的な願いは、出産の手助けと、子どもに与える食事であり、子の養育と密接に係わっている。また、この【タイプ E】に分類される話では、「女の怪異体」が人間に手助けを求める話型となっている。普通の人間であろうと、魔物であろうと、「子ども」というものが、ひとりではその存在を留めておくことができない儂いものとして描写されている。

ハーン家という貴族の出である身分の高い夫人が、水妖の侍女に呼ばれて、急遽、川底に助産婦として行かねばならなくなった。

「ハーン夫人と水妖」(『ドイツ伝説集』第 69 話)⁽⁸⁾

魔物の出産・難産に、「水妖」の類話が多くみられるのは、母胎内の羊水のイメージとの結びつきによるものであることは疑いようがない。ドイツ民俗学には、「水」の世界が、生と死の両方と関わり、この世に存在する異界への入り口として信仰されていたという記述がある。

人が死んだのちにおもむく世界は水底であるとか、人の魂は水底から生まれてくるといふ俗信からもわかるように、水と人の生命とは深いつながりがある。⁽⁹⁾

グリム兄弟の兄ヤーコブ Jacob Grimm は、『ドイツ神話(学)』*Deutsche Mythologie*において、自然界のエレメントを「土・火・水・気」の 4 つに分類し、その中でも土と水のモチーフは女性性を表わす⁽¹⁰⁾と述べている。「水妖」⁽¹¹⁾は水のモチーフであり、また【タイプ E】・【タイプ B】に含まれる「こびと」、【タイプ D】に含まれる「家霊」は土の

モチーフである。このように「子ども」の伝説には、「土」と「水」と関連の深い場所、怪異、道具⁽¹²⁾、そして「女性」が描かれている。

「子ども」と「女性」、そして「子ども」と「家」をつなぐモチーフには、家庭の守護者である存在と、「子ども」と外見的類似性がみられる「人型の小型の精霊（こびと型の精霊）」がある。この2点については、③においてさらに論じる。

② 不慮の死、失踪

【タイプ B】・【タイプ C】の型は、不意におとずれる子どもの死、子どもの失踪にまつわる伝説である。これは、【タイプ E】とは異なり、人間の子どもの中心となる。【タイプ B】の全 15 話・【タイプ C】の全 15 話をさらに詳細に分類すると以下のようになる。

【タイプ B】

- 子どもへの罰：3 話
- 子どもへの悪戯：2 話
- 子どもの失踪・取り替えっ子：10 話

【タイプ C】

- 溺死した子ども：5 話
- 殺害された子ども：3 話
- 子どもの死にまつわる言い伝え：3 話
- 呪われた子ども：4 話

【タイプ C】は、不慮の死を遂げる子どもに関する伝説である。【タイプ B】における子どもの失踪と取り替えっこの事例を含めると、いかに当時の「子ども」が寿命を全うできずに亡くなっているか、容易に想像できる。

美術史研究者のアニタ・シオルシュ Anita Schorsch は、『絵でよむ子どもの社会史 ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ』⁽¹³⁾の中で、中世における木版画の図像から、「子ども期」を「ゆりかごの時代」・「歩行器の時代」・「ゆり木馬の時代」・「学校の時代」の4つの期間に分け、現代のように年齢による区分がしっかりとなされていなかったと述べている。これは、乳幼児を含む、大人未満の人々への医学的な知識の欠落、経済状況・食料状況の不安定さ、子どもの精神に関する科学の未発達といった問題点が影響している。子どもの成長を取り巻く環境についてのベタシオルシュの記述をここに2カ所引用する。

古代から18世紀までの時期を通じて、子どもたちは、その両親たちと同じように、家や道路の汚物に慣らされていました。便所というものが、貧しい家ばかりでなく金

持ちの家においても、基本的に知られていなかった時代には、個人の清潔さということには考えも及びませんでした。⁽¹⁴⁾ (アニタ・ショルシュ／北本正章訳)

1600年以前—近代の宗教改革、経済改革および教育改革が起こる以前—の時代は、両親と年少の子どもたちの関係は疎遠で皮相であったように思われます。彼らが属していた社会階級の状況では、生みの両親は幼い子どもに愛情深く結びつくようになるための時間をほとんどもたなかったし、そうした時間をほとんど作ろうともしませんでした。⁽¹⁵⁾ (アニタ・ショルシュ／北本正章訳)

そして、ショルシュは乳幼児の死亡率の高さと、授乳を乳母にまかせる里子制度について言及し、里子期間における幼児の死亡時の子どもの取り替えについても指摘している。自分の子どもが、ある日突然別人のようになってしまう、あるいは実際に別の子どもとすり替えられてしまうのは、当時の社会的背景から考えても、決して珍しい事例ではない。つまり、病を発症した乳幼児の変わり果てた姿や、突然死してしまった子どもと別の子どもとのすり替えの犯罪などが、「取り替えっこ」と呼ばれる民間伝承の真実である。

メルヒェンに登場する失踪した子どもたちは、『グリム童話集』の「ヘンゼルとグレーテル」のように、いつかは元気な姿で家庭に帰ってくるが、伝説集に登場する「失われた子ども」たちは、「ハーメルンの笛吹き男」の物語のように、二度と帰還することはない。時に夢のような魔法によって救済されるメルヒェンの世界の「子ども」に対して、現実の世界の厳しい「事実」を語り継ぐ伝説では、「子ども」が異界から帰ってくる話型よりも、異界に取り込まれる話型の方が多い。すなわち、「子ども」の失踪に関する伝説において、奇妙なものはその事件そのものであり、その事件を引き起こす怪異体である。そして、伝説世界で強調されている「事実」は、「子ども」の死や不幸に他ならない。

『ドイツ伝説集』に収録されている「子ども」たちは、まさに「子ども」が完全に家庭、つまり両親の庇護下でない状況の出来事であり、大人の目が行き届かない子どもたちは、突発的な事故や、原因不明の病によって、命を落とすことが多かった。ショルシュの指摘では、母親も含め、自分の子とのつながりを十分に持とうとする努力は不足しており、短命の子どもたちへの愛着を極力持たないようにしたということであるが、伝説集における「子ども」の死亡の話は、なんの悲しみももたらさないものであったのか。次は、「子ども」を愛し、守り、善悪の観念を教えるものの存在について論じる。

③ 「子ども」を守るもの、「子ども」を諫めるもの

ドイツ民俗学者のレアンダー・ペッツォルト Leander Petzoldt の『デーモンと自然精霊の小事典』 *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister* によると、【タイプ A】と【タイプ B】の共通モチーフである「妻女（荒女）」⁽¹⁶⁾・「ペルヒタ」⁽¹⁷⁾・「ホッラさん」

は、「子ども」を守り、「子ども」を諫める存在であるという。子どもの怠惰を罰し、勤勉さと素直さには幸運を与える女性の姿の怪異体は、大地母神の零落した姿であり、かつての民間信仰の痕跡を伝える存在である。

精神医学を確立したカール・グスタフ・ユング Carl Gustav Jung は、「母元型」の特徴として、「母性」を挙げ、「保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの」とし、さらに「隠されたもの、暗闇、深淵、死者の世界、呑み込み、誘惑し、毒を盛るもの、恐れをかきたて、逃れられないもの」⁽¹⁸⁾と述べ、「母なるもの」の二面性を指摘した。

これとは異なる例としては、230 話目と、361 話目に、キリスト教と関連する「子どもを救済する存在」が描かれており、『ドイツ伝説集』における宗教の多層性がみられる。しかし、女性の姿をした怪異体が「優しい面・恐ろしい面」の二面性をみせる中で、キリスト教的な救済者は、子どもには優しい姿のみをみせる点で違いがある。

かつての女神たちに、子どもが恐ろしいと思う要素を与えたのは、神話から伝説への変成過程において、どのような意味があるのか。たとえば「水妖」は、「ホッラさん」などと同様に、「子どもを怖がらせるための存在」Kinderschreckgestalten⁽¹⁹⁾ともされている。ドイツ語圏の民間信仰において、人間が命を落とすところには、①危険な場所、②生贄を捧げる神的な場所、③魂の還る場所、といった3種類の意味がある。たとえば、伝説集の52番目には、溺死した人間の魂に関する話であるが、水死事故のあったその水辺には人間の魂がたくさん集まる場所として描かれている。そして、その水底には魂を管理する「水妖」がいて、魂が逃げ出さないように水中に人間の魂をとどめ続けている。

こういった「水辺＝魂の帰結する場所」という解釈は、母胎と水のモチーフの連関を如実に示すものである。母胎の羊水は、子どもが誕生する場所であり、かつての命が新しい命となって再生する場所である。生命の神秘、魂の循環、魂の消滅への恐怖が、女性のモチーフに込められていると考えられる。

そして、女性の怪異体が「子どもを怖がらせるための存在」として描かれるには、もうひとつの意味がある。「子ども」に危険がおよぶ場所には、「子ども」の恐怖を駆り立てる神的存在や怪異体が出現すると信じられ、「子ども」自身に注意喚起を促すとともに、「子ども」を養育する大人たちが躰のためにも語り継ぐ。

『グリム童話集』では「子ども」の道德教育的な要素を多く含んでいたが、伝説集における「子ども」像には、どのような善悪の要素が含まれているのだろうか。ここで、前述のショルシュのことばから、さらに「子ども」の内面についての記述を参照する。

中世では誰もがよい人間であることを期待されました。「よい」ということばで純真無垢ということの意味する場合、中世では現世においてこの善良さを実現可能であると考える人は誰もいませんでした。つまり、子どもたちが純真無垢の媒体でないのは、罪の媒体でもなく、救済の動因でもないのとまったく同じでした。⁽²⁰⁾

(アニタ・ショルシュ／北本正章訳)

しかし、17世紀に入り、近代初期になると「よい子は、孤独、自己鍛錬、敬虔、読み書き、勤勉などの楽しみを知り、清浄な回心体験を見だし、喜んでそれに専念するように期待されていた」⁽²¹⁾という。『ドイツ伝説集』が編纂されたのは19世紀の初めであるが、ここに収録されている伝説の原典の多くは16世紀から18世紀に記録された書物で、近代以前の「子ども」像と、それ以降のものが混在していると思われる。少なくとも、「子ども」が社会から逸脱しないように、育てやすい性質と美德を持つようにと、子どもを諫める伝説が、神話から派生したと解釈できる。

モチーフとしての「子どもを守り、諫める異界の存在」の話型には、子どもを養育するものとしての「女性」の社会的役割と、子どもの成長への理想と道徳的意識が、伝説の事実性の要素として、その背景に含有されていると思われる。

④ 「子ども」の霊、「子ども」の姿の精霊

【タイプD】の人間の子どもの姿の怪異体の例は、「飢饉を予言する神的な存在」と「家霊へと変容する子どもの霊」、そして大人を惑わし異界へと引き込む「子ども姿の精霊」の3種類がある。ユングによると、これらは「童児神」と呼ばれるもので、以下のような特徴を持っている。

この「童児神」の元型はいたるところに分布しており、神話に現れる他のあらゆる性質の童児と分ちがたく混じり合っている。(…略) 民間説話では童児モチーフは隠れた自然力の化身としての小人や妖精の姿をとって現れる。⁽²²⁾

(カール・グスタフ・ユング／林道義訳)

そして、この童児は捨てられること、迫害されることによって、超自然的な人間へとその本質を近づけて⁽²³⁾いく。しかし、これが成立するのは、その童児が英雄となるための条件のひとつであり、捨てられ、迫害され、命を落とした子どもたちは、またすぐに死者の世界へと帰還してしまう。「子ども」の生命の不安定さ、「子ども」がこの世から消失しやすいことが、この④のタイプの伝説の根源的イメージであると考えられる。

ここまでのタイプAからEの整理と話型分析によって、伝説の事実性と、伝説世界の不思議さが、読み手に与える意識が浮き彫りになった。メルヒェンにおいては、「子ども」の超自然的な能力は魔法のような奇跡を生み出していた。それに対して、伝説に登場する「子ども」のモチーフでは、「子ども」から派生した怪異体としての「こびと」や「家霊」と、単なる怪異の目撃者としての「子ども」とで話型が異なる。これは、「子ども」の成長や生命の維持に、周囲の手助けが必要であるという現実世界の反映であり、いかに「子ども」が死にやすい存在であったのかということを示している。伝説における「子ども」が、「童

子神」としての能力を発揮するには、異界へ一歩踏み込んでいること、すなわち霊体に限りなく近づくことが必須の条件であり、メルヒェンのような救済は、伝説では珍しい例であるといえよう。

4. おわりに

『ドイツ伝説集』において、「子ども」のモチーフは不思議な出来事と結びつけられていた。『グリム童話集』では、すべてではないが、命の失われた子ども、殺害された子ども、異界へ迷い込んでしまった子どもが救済される魔法が示されているのに対して、『ドイツ伝説集』では死すべき運命にある子どもは、キリスト教に関係する 2 話以外で、命を救われることはなかった。伝説というジャンルの持つ「事実性」は、奇譚・怪異譚という「不思議」が起こりうる舞台においても、「子ども」の蘇生という話を伝える可能性はほぼないといえることがわかった。伝説における「子ども」は、死にやすく、か弱いものとして、頻繁に異界へ侵入してしまう。そして、魔物との接触によって、命が奪われ、自らも怪異体へと転じてしまうことがある。

「子ども」は、家を守護する神的存在、霊的存在との縁が深い。しかし、かならずしも、それらの怪異体が「子ども」の生命そのものをいつも守護するわけではない。現実において、長く生きることが困難な時代の中で「子ども」が健やかに育つことへの祈り、「子ども」が魔に連れ去られないようにするお守りや迷信は存在しても、なお「子ども」は大人よりも死の世界と近いところで生きている。ふつうの人間として生まれながら、「子ども」は「怪異体」や「異界」に接近するモチーフとして伝説の中で描かれ、超自然的な存在として成立していた。そして、伝説の「事実性」という語りから、「子ども」を取り巻く当時の厳しい生育環境と、「子ども」の無事の祈願、そして大人とは異なる「子ども」の身体・精神の特殊性が明らかとなった。

〈注〉

(1)Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994.

『ドイツ伝説集』は上巻が 1816 年、下巻が 1818 年に刊行されている。本論で使用している伝説の作品番号は、初版に使用されている番号である。ヘルマン・グリム編の第 3 版にも、伝説の作品番号が付与されているが、グリム兄弟の編纂意図とは異なる伝説の挿入がみられるため、本論では初版の番号を使用する。また、本論で引用している『ドイツ伝説集』のタイトルならびに本文の邦訳は、すべて論者が作成したものである。

(2)Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den

Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.

『子どもと家庭の童話集』は慣行により、書名を『グリム童話集』と表記する。

(3) *Deutsche Sagen*, S.46.

(4) *Deutsche Sagen*, S.383.

(5) *Kinder- und Hausmärchen*, S.223.

(6) 『ドイツ伝説集』の伝説配列、伝説分類については、拙論『「ドイツ伝説集」のコスモロジー—配列・エレメント・モチーフ—』があり、これは『ドイツ伝説集』におけるグリム兄弟の伝説配列手法に言及した国内外では初めてのものである。日本の説話研究の手法を用い、伝説同士のつながりの法則にして論じている。

植朗子『「ドイツ伝説集」のコスモロジー—配列・エレメント・モチーフ—』鳥影社、2013年。

(7) 「怪異体」は論者による造語である。日本における説話文学研究では不思議な出来事、怪しい事件や現象を「怪異」と呼ぶが、これを引き起こすものについては、「鬼」「化け物」「妖怪」など統一をみない。また、ドイツ民俗学ならびにドイツの伝承研究においても、「妖精」「霊」「異界の住人」など、それぞれに呼称はあるが、これらを包括的に示す術語はない。よって、本論文では、「怪異体」を使用する。

(8) *Deutsche Sagen*, S.101.

(9) 谷口幸男、福嶋正純、福居和彦『ヨーロッパの森から ドイツ民俗学誌』NHK ブックス、1986年、p.229.

(10) Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden 2007, S. 617.

Deutsche Mythologie は、先行研究において『ドイツ神話学』、『ドイツ神話(学)』、『ドイツ神話』といった、いくつかの邦題がある。Mythologie は集合体としての神話、あるいはそれをもとにした近代の学問としての神話学といういずれの意味も含有している。そのため、本論文では『ドイツ神話(学)』と表記する。また、この箇所については、拙論「ドイツ民間伝承における樹木と泉をめぐる霊的存在-レアンダー・ペッツォルトの伝説分類と樹木霊 Baumgeist-」に詳細を記してある。(ゲルマニスティネンの会『*Flaschenpost*』36号、2015年。)

(11) Leander Petzoldt: *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*. München 1995, S.173. ドイツ民俗学者のレアンダー・ペッツォルト Leander Petzoldt (1934-)

によると、Wassergeist (水妖) には、男と女がいる。泉、池、川などを棲家としている。

(12) 家を守る宝物は、『ドイツ伝説集』において、金でできた指輪や、大地に染み込んだ死者の体液から生まれるアルラウネという植物、刀剣などがある。いずれも「土」のモチーフであり、これらを人間に与え、管理する怪異体の多くは土から誕生した「こびと」である。金属は普遍性の象徴であり、人間よりも寿命が長く、土の中で生活する「こびと」がそれらを発掘し、人間の世に送り出す。

(13) アニタ・ショルシュ、北本正章訳『絵でよむ子どもの社会史 ヨーロッパとアメリカ・

中世から近代へ』、新曜社、1992年、p.23。

(14) ショルシュ前掲書、p.37。

(15) ショルシュ前掲書、p.44。

(16) Petzoldt, S. 112f. 「荒女」や「麦女」は「穀物霊」の一種。

(17) Petzoldt, S. 34f. 「ペルヒタ」や「ホッラさん」はゲルマンの信仰における神話的存在であり、自然界の精霊である「穀物霊」とは性質が若干異なる。

(18) カール・グスタフ・ユング、林道義訳『元型論』、紀伊國屋書店、2009年、p108。林道義の訳のまま「モチーフ」という語を使用しているが、本文では「モティーフ」で統一している。

(19) Petzoldt, S. 173f.

(20) ショルシュ前掲書、p.224。

(21) ショルシュ前掲書、p.230。

(22) ユング前掲書、p.268。

(23) ユング前掲書、p.282。

【研究ノート】

本学^①における初年次教育への PBL の導入 － 独自のアンケートからの読み取り －

高橋 徹

はじめに

アメリカの高等教育機関で初年次教育が導入されるようになったのは 1970 年代からのことであるが、日本の大学で初年次教育の必要性が注目され始めたのはわずか十数年前からである。しかし国立・公立・私立とも急速に全国に広がっている。文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室の調査によると、2015 年度には国立・公立・私立を合わせて 93.5 パーセントもの大学が何らかの初年次教育を実施している^②。

本学においては比較的早くから初年次教育を手がけ、科目名と内容を変化させながら現在に至っている。現在は大学・短大とも第 1 セメスターでの必修科目「教養基礎セミナー」として実施しているが、2014 年度以後はその内容のひとつに PBL を取り入れている（詳細は後述）。

「教養基礎セミナー」は、2016 年度は大学では 8 つのクラスで、短大では 5 つのクラスで実施しており、内容は多岐にわたる。例として大学のひとつのクラスの動きを次に記す。他のクラスも順番は入れ替わるが大学・短大ともに内容は同一である。

【例】2016年度 教養基礎セミナー 大学Aクラス

第1回	ガイダンス 学長特別講義	全クラス合同
第2回	本学の歴史 PBL①	3クラス合同 PBL①はPBLの説明、班分け、各班のリーダー選出
第3回	図書館 OPAC検索	前半は図書館の案内。後半はコンピュータ教室に移動して OPAC検索を学ぶ
第4回	キャリアデザイン①	2クラス合同 ①・②・③とも外部講師を招いての講座
第5回	音楽博物館	2クラス合同 K号館の音楽博物館で実施
第6回	PBL②	班別討議の開始。テーマの選択、役割分担など
第7回	キャリアデザイン②	2クラス合同
第8回	Writing 原稿用紙	3クラス合同 日本語 Writing 支援室の教員による講座
第9回	PBL③	班別で選択したテーマについての討議とプレゼンテーション の準備を行う
第10回	キャリアデザイン③ キャリア支援室	前半はキャリアデザインの最終回。後半はキャリア支援室に 移動して職員から案内を受ける
第11回	Writing レポート作成	3クラス合同 日本語 Writing 支援室の教員による講座
第12回	PBL④	プレゼンテーション会場になる大教室でリハーサルを行う
第13回	小論文作成	前期授業内試験にあたる。1000字程度の小論文を作成
第14回	PBLプレゼンテーション①	4クラス合同。各回4つの班がプレゼンテーションを行う
第15回	PBLプレゼンテーション②	

一般に初年次教育で行われる教育項目は、大学生としてのマナー、レポートの書き方、文献資料の検索、コミュニケーション能力、自大学の歴史、ディベートなどであり（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「平成25年度の大学における教育内容の改革状況について」^③に詳しい）、本学の「教養基礎セミナー」では上述の通りそれらのほぼすべてを網羅した上でキャリアデザインを加えた内容になっている。

音楽大学の特性として、学生たちは入学時から専門分野への学修意欲が旺盛である。よって専門分野に対する動機付けの教育はほぼ不要である。しかし卒業後にそれぞれの専門分野そのもので就職をすることは困難であるから、音楽関連産業等を含めた幅広い視野での将来設計が必要となる。そのためにキャリアデザインを内容に加えている。

1. 本学における初年次教育の目的

本学における初年次教育では、上述の項目の中では「コミュニケーション能力」が、そしてそれに加えて「友人づくり」が特に重要なものになる。

近年の若者はコミュニケーション能力が低い傾向があり、その原因は携帯ゲーム機やスマートフォンの普及にあるのではないかとされている（ゲーム学会「オンラインゲームの使用が使用者に与える心理的影響」⁽⁴⁾などに詳しい）。せっかく公園に集まっているのに黙々と携帯ゲーム機で遊ぶ子どもたちの姿はつとに珍しくなく、すでにそういう世代が大学生になっている。本学においても例外ではなく、コンサートの企画などの話し合いを円滑に進めることが苦手だと言う学生は少なくない。

音楽活動を展開していくためには他専攻の学生との交流が不可欠であるが、授業編成上、異なる専攻の学生が接する機会は必ずしも多くない。たとえば、ピアノ専攻の学生は多くいるにもかかわらず管楽器専攻の学生がピアノ伴奏者を探すことに苦勞をするといった例はたいへん多かった。本学においては初年次教育の場で「友人づくり」の機会を提供することが充実した学修のために有効になる。

本学では休学・退学者を減らすための様々な取り組みを実施しているが、コミュニケーション能力向上と友人づくりに力点を置くことで初年次教育もその一端を担っている。

2. 「新入生歓迎祭」と「教養基礎セミナー」の連携

本学では入学式に近い日程で「新入生歓迎祭」を実施している。「教養基礎セミナー」に PBL が導入されたのと同年の 2014 年度からは「新入生歓迎祭」のクラス分けが「教養基礎セミナー」のクラス分けと同一になり⁽⁵⁾、「教養基礎セミナー」の担当教員が担当するようになった。もとより「教養基礎セミナー」のクラス分けは専攻の偏りがないようにされている。

「新入生歓迎祭」はまったく堅いものではなく、ガイダンス的な内容すら含まない。クラスごとに集まって自己紹介やゲームをし、その後は各教室で行われている各専攻の上級生たちの演奏を自由に聴いてまわり、クラスごとに昼食を楽しむという内容である。

「新入生歓迎祭」はいわば「教養基礎セミナー」のゼロ時間目として機能するようになり、学生間にある程度の友人関係ができ、学生と担当教員の間は無用な緊張感がなくなっている状態で初回の授業を実施できるようになった。

3. 本学における PBL

(1) 「教養基礎セミナー」に PBL を包含させることになった経緯

PBL は Project-Based Learning＝課題解決型学修を意味し、Problem-Solving-Learning＝問題解決型学修とも言う。その起源は 1960～1970 年代のアメリカとカナダの医学教育にあるとされている、アクティブ・ラーニング（能動的学修）の一種である。日本の大学においても主として医学部で早くから採用されている。

本学における課題解決型の授業はこの「教育基礎セミナー」での PBL が初めてではない。かつて教職科目の集中講義として開講されていた「総合演習」⁶⁾の内容は課題解決型学修であり、教職部会の教員は長くその経験を積んできた。「総合演習」の受講生からは「他専攻の友人ができた」「上級生になってからではなく入学早々に受けたかった」などといった声が寄せられていた。

本学では 2013 年度に教養教育検討委員会⁷⁾が発足し、初年次教育をより充実させるための議論をすることから着手した。そこで「総合演習」の教育内容を初年次教育として実施すべきであるとの結論に到り、経験をもつ教職科目担当の教員の協力を得てその内容を「教養基礎セミナー」に包含させることになったのである。

(2) PBL の各回で行うこと

前出の表の通り「教養基礎セミナー」は大学・短大ともに第 1 セメスターの 15 回の授業のうち 6 回が PBL 関連で、その回数は 2014 年度から 2016 年度まで変更がない。各回の概要は以下の通りである。

PBL①

「本学の歴史」に続いて約 60 分で行う。プリントを配布し PBL の意味、趣旨、実施にあたっての注意事項を説明する。そこには教育基本法に示されている大学の役割や大学生としての学修のありかたについての説明も含まれる。プリントには音楽に関わるものに限らない様々なテーマの例が 40 項目以上記載されている (図 1)。多くのテーマを例示されることによって学生たちはすぐさま討議のイメージを膨らませることになる。

図 1 PBL①で配布するプリントの一部

<p>・大阪音楽大学のゆるキャラ 大阪音楽大学のゆるキャラをつくるにすれば、どんなキャラクターをつくれますか。各地のゆるキャラの特徴を分析し、ゆるキャラコンテストに出場できるような愛称、仮名の本名、容姿(図示または模型作成)、性格、特技、趣味等を設定してください。</p>	<p>・日本の文化を知ろう 私達は、西洋の(外国)の文化を勉強しています。今、日本では、和食より洋食を食べ、和服より洋服を着て生活するようになりました。そんな私達は、日本の文化について、語れるでしょうか？ 日本の文化を知り、海外の人達に紹介しましょう。</p>
<p>・なりたい中学校教員は 中学校の音楽の教員になるとしたら、どんな教員になりたいですか。理想とする教員像をまとめてください。音楽の苦手な生徒、校内暴力、いじめ、不登校の生徒への対処も想定してください。</p>	<p>・バリアフリーについて 私たちが生活する社会は、高齢者や体の不自由な人々にとってはたして過ごしやすいでしょうか。その人々の視点で様々なところを観察し、良く考えられている点、まだまだ改善しなければならない点を考え、発見してみましょう。</p>
<p>・効率の良い練習方法は 楽器(歌)の練習はどのようにすれば効率よくできますか。一日 2 時間しか練習できない場合を想定して答えてください。</p>	<p>・長続きする庄内の店 庄内に新規オープンする店のスタッフになりました。立地条件や顧客対象など一からスタートできます。長続きする店を考えてください。</p>
<p>・海外提携校へ留学する準備は 本学の海外提携校であるドイツのデトモルト音楽大学に 1 年半後の 10 月から半年間留学し、その期間中、学生寮で生活することになります。どのような準備を</p>	<p>・スマホの新機能とアプリ スマートフォンのニューモデル開発プロジェクトの一員に任命されました。加えたい新機能や</p>

続いて各クラスに分かれて班分けを行う。班分けに際しては、班の数を示した上でなるべく専攻や男女の偏りが無いようにとアドバイスをのみで、原則的に教員は手を貸さない。すでに「新入生歓迎祭」などで人間関係が形成されつつあるので概ねスムーズに行われる。じゃんけんやくじ引きで決めようとするクラスにはそれをやめさせ、あくまで話し合いで決めるよう指導する。時間に余裕があればリーダーの互選をする。

PBL②

班別討議を始める。役割分担（リーダーが決まっていなければリーダーの互選も）、テーマの選択、今後の活動の打ち合わせ、連絡先の交換などを行う。

テーマは PBL① で配布したプリントから選択することが原則だが、複数のテーマを組み合わせることも許す。また、討議を進めていく中でぶれが生じて独自のテーマに変わってしまうこともあるが、それも許す。

PBL③

引き続きテーマに関する討議をし、プレゼンテーションの準備を行う。

PBL④

教室では引き続きプレゼンテーションの準備を進め、順次プレゼンテーション会場になる大教室に移動してリハーサルを行う。

プレゼンテーション①、プレゼンテーション②

2 回に分けて全班がプレゼンテーションを行い、互いにそれを見る。プレゼンテーションでは OHP、PowerPoint、CD、DVD などの機器類とピアノが使用可能である。音楽大学らしく、歌唱、演奏、寸劇などを交えたものが多く、見る者を楽しませるプレゼンテーションが展開される。

採択されるテーマで最も多いのは「学食の新メニュー」である。このテーマを選んだ班は他大学の学生食堂の食べ歩きを報告することが多く、プレゼンテーションからはその班が PBL を十全に楽しんだことが伝わってくる。

次いで「スマホの新機能とアプリ」、「大阪音楽大学のゆるキャラ」などの、アイデアを提案するテーマを採択する班が多いが、例示されたテーマから変化した、あるいは例示からインスピレーションを得た独自のテーマも多い。たとえば例示には「いわゆる『音大生』に対する世間のイメージとはどのようなものでしょうか？ そのイメージに対して皆さんはどのように感じますか？」があるが、それが「音大での恋愛事情」に変化するのである。討議が活発に行われた結果として変化するものであるから、これは好ましいことであろう。

4. アンケートから読み取れるもの

(1) アンケートの項目

2014～2016年度の最終授業時（プレゼンテーション②の終了時）にPBLに限定した独自のアンケートを実施した。用紙はB6サイズで、項目はわずかに4つである（図2）。

図2 アンケート用紙

PBLに関するアンケート

① PBLの趣旨を念頭に置いて取り組みましたか
そう思わない ———— どちらとも言えない ———— そう思う
 1 2 3 4 5

② 十分にグループに参画しましたか。
そう思わない ———— どちらとも言えない ———— そう思う
 1 2 3 4 5

③ PBLでの体験は今後の学生生活に役立つと思いますか。
そう思わない ———— どちらとも言えない ———— そう思う
 1 2 3 4 5

④ PBLに関して自由に記述してください
(意見、感想、体験をどう役立てるかなど)

短時間で済ませるためであるが、近い時期に学生生活満足度調査（2015年度から）と授業評価アンケートが実施されており、学生がアンケートに辟易としている可能性があることを考慮したことと、シンプルなアンケートをとり続けるほうが学生の傾向を把握しやすくなることを期待してのことである。

本学における初年次教育へのPBLの導入

(2) 設問①、②、③の集計結果

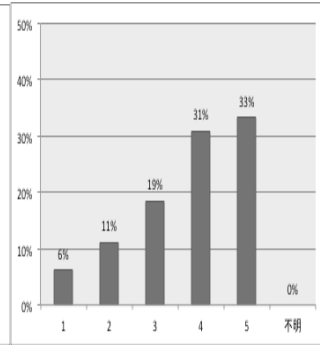
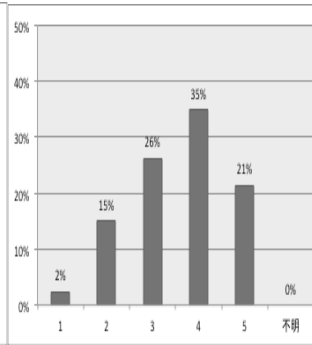
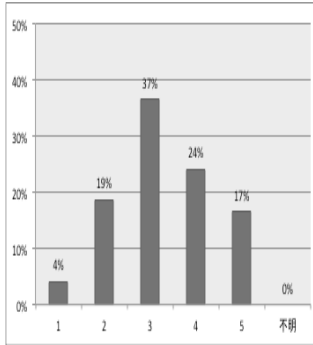
[大学] 回答数 2014年度：145、2015年度：126、2016年度：162

① PBLの趣旨を念頭に置いて取り組みましたか

2014年度 (平均 3.30)

2015年度 (平均 3.58)

2016年度 (平均 3.74)

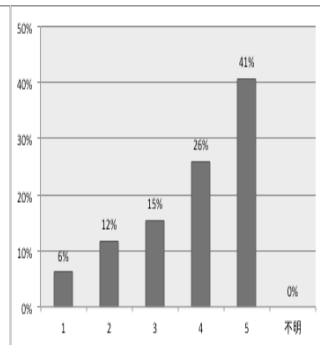
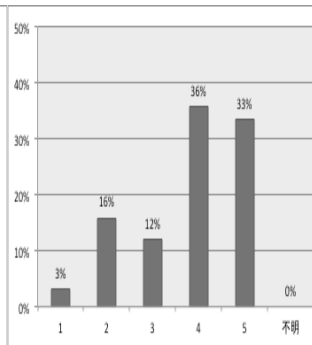
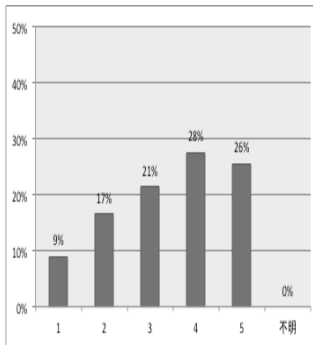


② 十分にグループに参加しましたか

2014年度 (平均 3.44)

2015年度 (平均 3.80)

2016年 (平均 3.83)

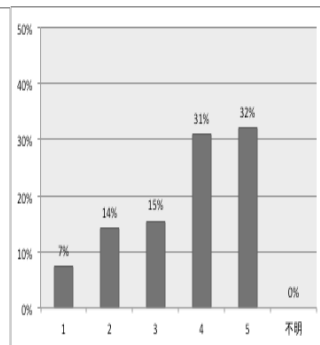
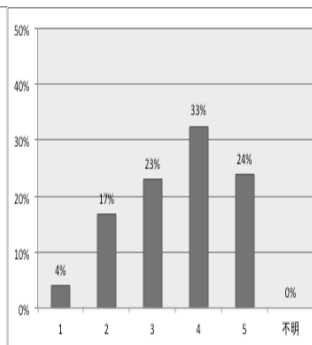
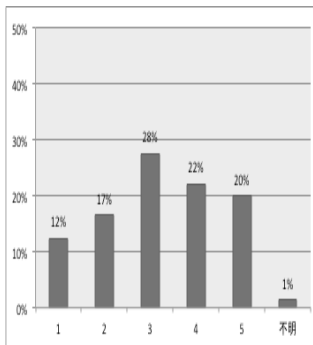


③ PBLでの体験は今後の学生生活に役立つと思いますか

2014年度 (平均 3.17)

2015年度 (平均 3.56)

2016年度(平均 3.66)



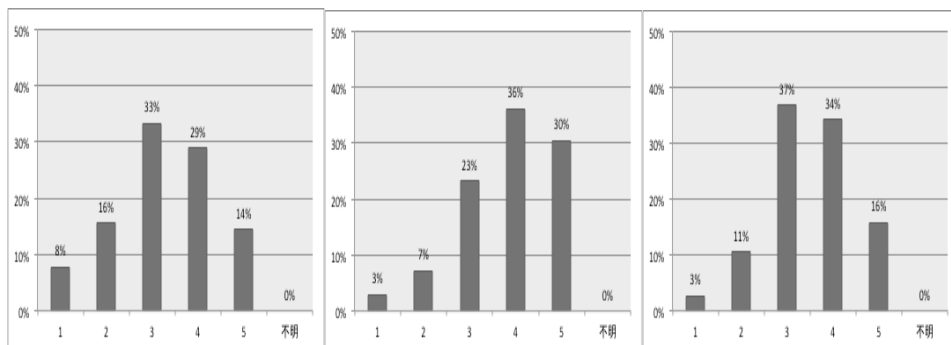
[短大] 回答数 2014年度：90、2015年度：69、2016年度：76

① PBLの趣旨を念頭に置いて取り組みましたか

2014年度 (平均 3.27)

2015年度 (平均 3.84)

2016年度 (平均 3.50)

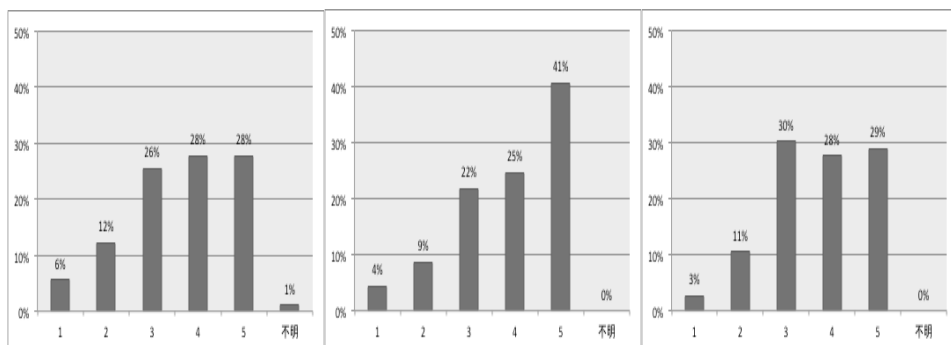


② 十分にグループに参画しましたか

2014年度 (平均 3.57)

2015年度 (平均 3.88)

2016年 (平均 3.70)

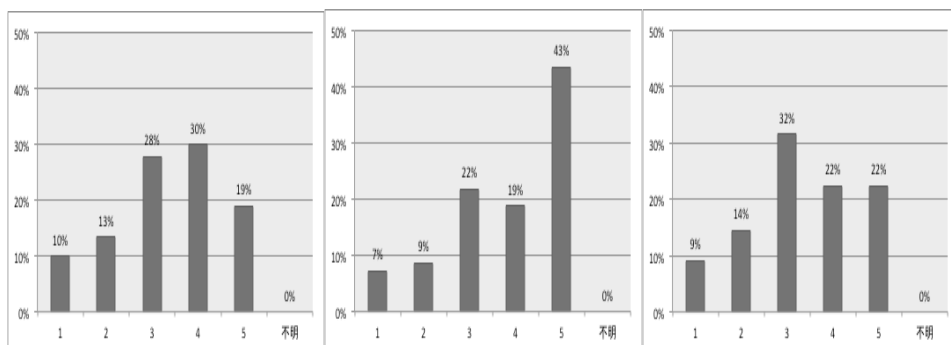


③ PBLでの体験は今後の学生生活に役立つと思いますか

2014年度 (平均 3.34)

2015年度 (平均 3.83)

2016年度(平均 3.34)



(3) 集計結果の俯瞰

グラフを俯瞰する、あるいは平均を比較すると学生が感じた充実の度合いが見えてくる。

2014 年度と 2015 年度では設問①、②、③とも大学のほうが若干低評価であるものの大学と短大のグラフの形は概ね相似している。一方 2016 年度では設問①、②、③とも大学は高評価、短大は低評価になっている。大学で高評価になっていることには 2016 年度に大学に 2 つの専攻（ミュージッククリエーション専攻とミュージックコミュニケーション専攻）が新設されたことが影響しているものと考えられる。

ミュージッククリエーション専攻の学生は入学時に MacBook Pro を支給されそれを大いに活用している。彼らが PowerPoint や Keynote を使ってプレゼンテーションの資料の作成を担当する班は議論や作業の効率が良い傾向が見られた。

ミュージックコミュニケーション専攻は実技を専門領域としないコースで、学生の気質は一般の大学のそれに近い。やはりコンピュータの扱いに慣れている学生が多く、気質の違いが議論を活発にする傾向もあり、それがある程度数字に表れていると考えられる。

短大で低評価になっていることについては後述する。

大学・短大ともに 2014 年度に比べて 2015 年度では 3 つの項目ともに大きく上向きになっている。担当教員のスキルアップが要因であろう。

PBL では教員は学生に適宜アドバイスをすることはあっても答えや答えに近いものを示すことは避け、学生の自主性を引き出すことを心がけるべきである。成功体験だけではなく、失敗体験もまた学生にとって貴重である。小さい失敗ならむしろ経験させたほうが良いのである。ゆえに教員は行き詰まりや失敗を予見したときに、安易に解決策を与えるのではなくヒントを与えるにとどめ、見守る姿勢が求められる。そのことは教養教育検討委員会や授業担当者会議で申し合わせているが、実践は容易でない。2014 年度では PBL の経験をもつ教職担当教員を除く他の教員は皆 PBL に関して初心者で、スキルが足りなかった。しかし教員もまた経験を積むことで 2015 年度では進歩を見せたと言えるだろう。

(4) 設問①「PBL の趣旨を念頭に置いて取り組みましたか」について

PBL の趣旨は初回の PBL（PBL①）で説明をするが、学生は議論や作業に熱中する過程でそれを忘れてしまいがちである。担当教員はそれを察知したときに適切なアドバイスをすることになる。

大学では毎年確実に良い状態に向かっていることが読み取れる。担当教員のスキルアップが要因になっているだろう。一方短大では 2014 年度から 2015 年度に大きい上昇が見られるが、2016 年度では低下している。短大のほうは 6 クラスで運営していたものを 2016 年度に 5 クラスに減じたために 1 クラスあたりの学生数が増えており、それが影響した可能性がある。

もとよりこのアンケートは学生個々の自己評価であり、実際とのずれが生じている可能性はある。

(5) 設問②「十分にグループに参画しましたか」について

初回のPBL (PBL①) では、単に参加するのではなく積極性をもって参画することの重要性を特に強く説いている。それを体現できたかどうかを問うものである。

この設問でも大学では毎年良い状態に向かっていることが表れているが、短大では2016年度で若干低下している。班ひとつあたりの学生数が増加したことが原因と考えられる。

(6) 設問③「PBLでの体験は今後の学生生活に役立つと思いますか」について

予想を問うものであり、答えにくい設問であろう。

大学・短大とも3年度のすべてで、設問①、②よりも1 (そう思わない) の回答が多いことが残念であるが、PBLを通して体得されるものに即効性は期待できないから仕方がないことかもしれない。

この設問でも大学ではゆるやかではあるが毎年良い状態に向かっていることが表れている。

短大は2015年度で5 (そう思う) が43パーセントと突出している。これについては次項で考察する。

(7) 設問④「PBLに関して自由に記述してください (意見、感想、体験をどう役立てるかなど)」について

この自由記述に関しては3年度で著しい差異はない。

ポジティブなものとしては「他の専攻の友人ができた」「他の専攻の人たちと協力して発表に向かって作り上げていくことが楽しかった」「音楽活動に必要なチームワークを学ぶことができた」などといった、専攻が異なる学生と交わることのメリットを記したものが最も多かった。われわれが「教養基礎セミナー」にPBLを導入する構想通りに結果が表れたと言える。

それに次いで「いろいろなプレゼンを見ることができて勉強になった」「テーマの内容を工夫して深めることは今後働くときや企画を立てる機会役で役立つ」「PowerPointをうまく使えるようになった」「Keynoteを使って資料を作ったことは社会に出てから役立つと思う」などといった企画や発表の仕方について学んだという記述が多い。

ネガティブな記述でもっとも多いのは3年度とも「時間が足りない」だった。テーマの選択からプレゼンテーションの準備までの一連の討議と作業を3回の授業時間の中で済ませることにはたしかに無理がある。授業時間以外にメンバーが集まらなければならないが、次いで多い記述は「メンバーのスケジュールを合わせるのが難しかった」であり、3番目に多い「大変でした」「しんどかったです」に結びついていると考えられる。

スケジュールを合わせるのが難しいとの記述は大学よりも短大に多い。短大は大学よりも時間割が密になる傾向があり、学生の約半数が本校から離れたK号館で多くの授業を

受けているという物理的な要因がある。2017 年度以降は K 号館の機能が本校に隣接した新校舎に移るので、短大の学生の負担はやや軽減されることになるだろう。

PBL の授業回数が少ないことについては解決が難しい。PBL を増やせば必然的に「教養基礎セミナー」の他の内容を減らすことになる。教養教育検討委員会で検討をしているが結論には到っていない。懸案事項である。

大学・短大ともに 3 年度にわたって「非協力的な人がいると班の空気が悪くなる」「大学生ならもっと一人ひとりがやるべきことをしてほしいと思う」などといったメンバー間の温度差の不満を訴える記述が若干数ある。複数人数でひとつのミッションを遂行する場合に温度差はつきものだが、学生にはそれがストレスになり得ることが表れている。しかしこれもまた将来に有用な体験であろう。

設問①、②、③の集計結果で要因が不明な箇所が、設問④を読み取ることである程度の推測ができる。

設問③（PBL での体験は今後の学生生活に役立つと思いますか）で短大は 2015 年度で 5（そう思う）が 43 パーセントと突出している。2015 年度の設問④（自由記述）を見ると「グループで何かをすることはとても役に立った」「皆で作り上げるのが楽しかった」「仲間と協力する力を学んだ」「考える力が刺激された」「皆と仲良くなれて毎週とても楽しくて Happy な気持ちになりました」などといったポジティブな記述が特に多く、PBL が良好な友人関係を築くことに役立つことがうかがえる。

しかしながらすべての班がスムーズに PBL を進められるわけではない。それはアンケートにも表れている。スムーズに進むかどうかはリーダーのパーソナリティが要因になることが多いと授業担当者会議で報告されている。

文字通りのリーダー（leader＝先導者）が良い結果をもたらすとは限らないとの報告は興味深い。能力が高いリーダーはしばしば他の学生が参画しにくい状態を作ってしまう。むしろ誰がリーダーなのかわからないような班のほうが活発な討議が展開されることが多いのである。PBL を進めていく中で次第に選出されたリーダーとは別の学生が実質的なリーダーになっていく班も少なくないが、そういう班も活発な意見交換を展開することが多い。

前述の通りリーダーは PBL①または PBL②で互選される。まだ個々のパーソナリティが十分にわかっていない時点での互選だから、適任でない学生がリーダーになってしまうことがしばしばあるのは仕方がない。PBL がスムーズに進まない班やそのリーダーに対しては担当教員の柔軟かつ適切な指導が必要になる。今後の研究課題である。

(8) 班の人数

「教養基礎セミナー」のクラス数、各クラスの学生数、各クラスの班の数、各班の人数は次の通りである。

		2014年度	2015年度	2016年度
大学	クラス数	6クラス	8クラス	8クラス
	1クラスの学生数	約29名	約19名	約24名
	1クラスの班の数	3	2	3
	各班の人数	約10名	約10名	約8名
短大	クラス数	6クラス	6クラス	5クラス
	1クラスの学生数	約19名	約19名	約22名
	1クラスの班の数	2	2	2
	各班の人数	約10名	約10名	約11名

アンケート結果でもっとも注目すべきは2016年度で、大学は設問①、②、③とも前年よりも上まわったのに、短大では①、②、③とも前年を下まわったことである。2014年度、2015年度では各班の人数は約10名であったのに対し、2016年度は、大学は約8名に、短大は約11名になったことが要因であろう。

班の人数が多くなると全員が積極的に参画することが難しくなり、授業時間外に集まることも困難になる。逆に班の人数が少なくなると個々の負担が過大になるはずである。

しかし2016年度の大学の設問④（自由記述）には個々の負担の重さを訴える記述は皆無である。むしろ2014年度、2015年度の大学・短大とも、および2016年度の短大の設問④に「疲れました」「大変でした」「負担でした」といった記述が見られることが興味深い。学生が負担に感じるのは仕事量よりも積極的な参画ができないストレスにあるのではないだろうか。

短大の設問④では2015年度に「友人ができた（増えた）」の記述が多いが、2016年度にはそれがたいへん少ない。単純に考えれば班の人数が増えれば友人も増えやすいはずだが、実際はそうではないようだ。円滑な活動があつての友人作りなのだろう。

断言をするにはまだデータが少ないが、本学におけるPBLの班に適した人数は8名前後であり、10名を超えると円滑な活動が困難になることを暫定的な結論としたい。

おわりに

3 年経ったとはいえ、本学の初年次教育における PBL はまだ始まったばかりである。2015 年度からは「音楽基礎セミナー」(大学のみ。第 2 セメスター)でも PBL を取り入れており、初年次教育以外の授業でも部分的に PBL 的な方法を取り入れている例がある。アクティブラーニングは初等、中等、高等のすべての教育の場で広がりを見せていて、次期の学習指導要領ではそれがさらに明確に示される見込みである⁽⁶⁾。本学においてもさらにアクティブラーニングや PBL は重要視されるようになっていくだろう。本稿がその発展の一助になることがあれば幸いである。

注

- (1) 本稿において「本学」は大阪音楽大学音楽学部と大阪音楽大学短期大学部の両者を指す。また大阪音楽大学音楽学部を「大学」、大阪音楽大学短期大学部を「短大」と表記する。
- (2) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「平成 25 年度の大学における教育内容の改革状況について」(2016 年 9 月)、p.18。PDF 版の URL は以下。
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afiedfile/2016/05/12/1361916_1.pdf
- (3) 同上書(2)、p.18。
- (4) ゲーム学会「オンラインゲームの使用が使用者に与える心理的影響」(平井大祐、葛西真紀子)。PDF 版の URL は以下
<http://ogrl.main.jp/study/ogr01.pdf>
- (5) 短大での科目名は、2014 年度までは「大音コミュニケーション入門」だった。2014 年の時点で授業内容は大学と同一であったので 2015 年度より科目名を大学と同じ「教養基礎セミナー」に改めた。
- (6) 教育職員免許法に基づいて 1998 年に導入し、2008 年の同法の改正により廃止した。
- (7) FD 総括委員会の下部組織として発足した。教養教育部会、外国語部会、教職部会の教員を中心に構成され、2013 年度から 2015 年度は筆者が座長をつとめた。
- (8) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会 配付資料 1。URL は以下。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm

【研究ノート】

トーマス・マンの『ファウストゥス博士』における古楽観

杉山 恵梨

はじめに

戦後のマン研究は、研究者が置かれた政治的、文学的状況に左右されていたが、徐々に、文献学的、実証主義的な研究が整理され、今世紀に至るまでには、研究の切り口が多岐に分かれるようになった。マン作品中の音楽に関する記述が、作品を理解する上で欠かせないものとして、マンと音楽における結びつきへの関心は高まったと言えるが、音楽学的な見地におけるマン作品への考察は、今後、広げていかねばならないと筆者は考えている。

『ファウストゥス博士』(1947)について、マンは、『ファウストゥス博士の成立』(1949)の中で、「問題ある、罪を犯したひとりの芸術家の物語という衣を着た、まさに私の時代の長編小説」⁽¹⁾だと示している。『ファウストゥス博士』は、主人公である作曲家アードリアン・レーヴァーキューンの生涯が、第二次世界大戦で崩落を迎えようとするドイツの状況と重ねて、書かれている作品である。読者は本作品を、ナチズムと関連されるドイツの時代小説として理解しようとする傾向にある。しかし、『ファウストゥス博士』が、マンの時代における文化事情を背景として、作曲家を主人公に据えて書かれた伝記体の小説であるということを忘れてはならない。

本研究のねらいは、マンの『ファウストゥス博士』から古楽に関わる事象を挙げ、ドイツにおける古楽運動史と照合させることで、1940年代までのドイツの古楽の状況を再検討することである。1960年代には、「古楽」という言葉の定義は、古い時代（例えば、バッハ以前）の音楽⁽²⁾そのものを指すだけでなく、ある作品を演奏するにあたって、その音楽にふさわしい演奏を指すものとして用いられるようになっていく⁽³⁾が、本稿では1940年代までの古楽の状況を対象としている。

『ファウストゥス博士』には、作曲家レーヴァーキューンをめぐって、オリジナル楽器や古楽の演奏会の様子が記述されている。『ファウストゥス博士』に関する、これまでの音楽学的な考察としては、現代音楽とその作曲技法や音楽家に焦点を当てた研究は見られたものの、ほぼ同じ頃に演奏実践の分野において成立した、古楽の問題を主題とする研究は少ない。筆者は、ドイツ語圏の国々および日本の古楽受容に関する研究を今後、進めたいと考えているが、その一つの段階として、本稿では『ファウストゥス博士』における「古楽」について考察を試みることにする。

1. 20世紀中頃までのドイツの古楽

もし「古楽」を、昔の音楽を、その時代の楽器で、その時代の演奏様式で演奏する、というような狭い意味でとるなら、「古楽」運動は20世紀に入ってしばらくしてから始まった、と言える。そもそも20世紀初頭までは、「時代様式」という観念自体がほとんど存在しなかった。

しかし、そのような狭い意味ではなく、単に昔の音楽に関心を抱き、それをなんらかの形で音にする、というような広い意味でとるなら、そのルーツは1710年頃にロンドンに設立された古楽アカデミーが、1720年代にバッハ以外の古典派以前の作曲家、パレストリーナ、バード、ビクトリアなどの作品を演奏して成功を得ていた頃にまで遡ることができる。⁽⁴⁾

ドイツにおける古楽復興の始まりとして位置付けることができる出来事は、1829年にベルリン・ジング・アカデミーにて開催された演奏会である。1829年、メンデルスゾーンの計らいによって行われた、バッハ《マタイ受難曲》の蘇演⁽⁵⁾は、聴衆の要望により2回公演となり、2回共に満員だった。1802年、ヨハン・ニコラウス・フォルケルが、当時忘れられていた存在のバッハを伝記として書いたこともライブツィヒの人々に影響を与えているが、メンデルスゾーンの蘇演が、古典派以前の音楽の演奏実践に対する、人々の関心を高めたことは確かだろう。⁽⁶⁾

19世紀の古楽復興において、音楽学による演奏実践の研究は大きな役割を果たした。同じ19世紀に発展を遂げた音楽学であるが、フリードリヒ・クリュザンダーが提唱した新たな造語による「音楽学」Musikwissenschaftはドイツで発祥した。グリュザンダーは、「過去の音楽は学究精神を持って校訂し、演奏されなければならない」と、演奏実践における原則を打ち立てた。⁽⁷⁾学問的な校訂作業が進歩した結果、古典派以前の音楽が楽譜として出版されるようになり、バロックやルネサンスのレパートリーが、演奏者や作曲家の目に触れるようになっていく。しかし、それらのレパートリーを、演奏者や楽譜校訂者は、現代の作品と同じように扱うのが常であった。フリードリヒ・ブルームは論考⁽⁸⁾で、オートー・ヤーンの言葉を引用⁽⁹⁾し、歴史的なアプローチの常軌は19世紀後半に明確に示されるようになったと述べている。古典派以前の音楽の演奏に適した楽器、および楽器の修復作業への関心は、19世紀末頃から西欧の各地域で大きくなっていくが、ドイツでは、パウエル・デ・ヴィット（1852-1925）などによって、楽器収集がなされた。

20世紀以降の演奏家も、特にバッハ以前の作品に対して、「現代流」による解釈で演奏することに限界を感じるようになっていた。⁽¹⁰⁾そこで、真正性 **authenticity** を追求した古楽的なアプローチによる演奏実践、つまり「歴史的な情報に基づく」演奏 **historically informed performance**（本稿では以降、HIPと記す。）を目指す演奏家が、20世紀後半に西欧中に出現する。それまでになかった古楽運動を巻き起こし、HIPを探求する演奏家たちは、17、8世紀の実用理論書や教則本を研究し、音楽学者と共に、楽譜の原典版を起

こす作業も行った。⁽¹¹⁾ ジェミニアーニやクヴァンツ、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ、レオポルト・モーツァルト、アグリーコラなどによって 18 世紀中頃に著された教則本⁽¹²⁾は、バッハ以前の作品の演奏習慣や演奏法の研究をする上でなくてはならない貴重な史料であると考えられるようになった。また、オリジナル楽器の使用や時代楽器 *period instrument* の収集や修復、加えて、古典調律法⁽¹³⁾による楽器を用いた演奏が盛んになっていく。

19 世紀のドイツは学術面において古楽復興を推し進めていたが、1905 年にミュンヘンを拠点としたドイツ古楽協会が設立されると、演奏実践面においても古楽運動の中心的役割を担っていくようになる。ドイツ古楽協会の始まりは歌手 1 人と器楽奏者 4 人のアンサンブル団体だったが、ベルンハルト・シュタフェンハーゲン (1862-1914) の指揮の下に団員は増えていった。レパートリーは、ドイツのバロックや、初期の古典派を主としていた。ドイツ古楽協会の設立者の一人であったクリスチャン・デベライナー (1874-1961) は、第 1 次世界大戦中にアンサンブルが解散するまで、ヴィオラ・ダ・ガンバを担当し、演奏していた。彼は、ミュンヘン音楽アカデミーに古楽のコースを、実験的ではあったが開設に漕ぎ着けている。しかし、デベライナーの奏法はモダンに近いものであり、楽器の状態もオーセンティックなものではなかった。⁽¹⁴⁾

一方、フーゴ・リーマン (1849-1919) はライプツィヒ大学で、リーマンの弟子ヴィリバルト・グルリット (1889-1963) はフライブルク大学で、バロックのコレギウム・ムジクムを展開し、その後も 20 世紀前半に研究者によって、ドイツやオーストリアの大学へのコレギウムムの創設が広まっていった。加えて、このコレギウム・ムジクムと並行して、オルガンの復興運動⁽¹⁵⁾が 1920 年代に展開していく。

このオルガンの復興運動、そしてドイツにおける古楽運動は、青年運動として知られるワンダーフォーゲルとの結びつきが強いことが指摘できる。⁽¹⁶⁾ワンダーフォーゲルの目的は健康の促進だけでなく、ドイツ人の若さの回復を目指していた。また、同時代のアーツ・アンド・クラフツ運動のように、画一化を求める工業化社会への牽制としての意味合いを有していた。彼らの活動は、ドイツ民謡によるレパートリーをリュートの伴奏で歌うことも含んでいたが、その民謡の編曲を担当した、フリッツ・イエーデ (1887-1970) とリヒャルト・メルラーは、リュートに関する書物の出版や、ヴィオール属の楽器の収集、歴史楽器の複製、といった事業にも奔走している。様々な運動が結びつき、ドイツにおいて楽器の修復に携わる工房が増えた。1921 年には、ペーター・ハルラン (1898-1966) はリュートやヴィオラ・ダ・ガンバのほかに、クラヴィコードなどの鍵盤楽器の製作にも手をつけるようになる。後に、ハルランはリコーダーの運指法について研究し、ワンダーフォーゲルや国内の古楽協会におけるリコーダーの演奏活動にも影響をもたらした。

しかし、1930～40 年代におけるドイツでは、ワンダーフォーゲルの集団活動、および民謡の歌唱活動は、国粹主義的な宣伝活動として、ファシストに利用されるようになっていく。演奏面においても、研究面においても、ナチスの目を気にして作られたものが定着

し、古楽運動も都合よく利用されていった。⁽¹⁷⁾ドイツがそのような状況に位置する一方で、1933年にアウグスト・ヴェンツィンガー（1905-1996）とパウル・ザッハー（1906-1999）は、古楽の演奏に歴史を持つバーゼルに、古楽の研究教育機関として、バーゼル・スコラ・カントルムを設立する。スイスは中立国だったため、第二次世界大戦中もスコラ・カントルムは機能していた。純粋な古楽運動の展開が極めて困難な状況にあるドイツとは対照的に、バーゼルは、1930年代以降に古楽の分野で急速に発展を遂げていく。このバーゼル・スコラ・カントルムの存在は、大戦中におけるドイツの古楽運動がいかにねじれたものであったかを証す存在でもあるだろう。1940年から50年頃に、ドイツの古楽運動に関わった演奏家や研究者の中には、次第に地位を失い、余儀なく、アメリカに移住、亡命せざるを得なかった音楽家が存在したのである。

2. 『ファウストゥス博士』における古楽

長編小説の本作品は、1943年から1945年までの間に、哲学博士のゼレーヌス・ツァイトブロームによって語られる、作曲家レーヴァーキューンの生涯が軸となっている。レーヴァーキューンは創作活動の行き詰まりを回避するため、また靈感を得るために、意図的に梅毒に感染し、破滅の道を進んでいく。レーヴァーキューンの運命については、悪魔に魂を譲り渡すファウスト伝説がもとになっている。マンは、1940年に亡くなる主人公レーヴァーキューンに、自ら滅びゆく祖国を重ねることで、物語にドイツ批判を込めた、と考えることができる。

作品中、登場するレーヴァーキューンの音楽理論は、シェーンベルクの現代音楽の理論をモデルにしたものと見られ、作品の随所に、当時の音楽や芸術への言及が見られる。マンの芸術に対する鋭い眼差しは、ドイツにおける現代芸術の危機に、警鐘を鳴らしたメッセージとして捉えることも可能だろう。加えて、現代音楽と古楽の両ジャンルに関する記述が見られることは、本作品における音楽の特徴の一つである。

以下には、『ファウストゥス博士』から古楽に関わる部分を引用し、ドイツにおける古楽の状況と照らし合わせて、考察を行う。

引用 1

「カイザースアッシェルンの商店街、市場通り、穀物商人通りから脇に入った静かな場所、ドーム近くの、歩道のない、ごく小さな路地、そこにニコラウス・レーヴァーキューンの家がひとときわ堂々と聳え立っていた。[中略] 訪問手や買手たち——買手はよそからも、ハレやライブツィヒからすら大勢来たのである [中略] この事実は、ニコラウ

ス・レーヴァーキューンがあらゆる方向に、マインツ、ブラウンシュヴァイク、ライプツィヒ、バルメンなど、楽器製作におけるドイツの中心地ばかりではなく、ロンドン、リヨン、さらにニューヨークなど、外国の商会とも取引関係を持っていたことを示している。彼はこれらのいたるところからシンフォニーの楽器を取り寄せたし、また、これらの楽器の、単に質的に一流であるばかりではなく、どこでも直ぐ手に入れられるとはいかないものまで備えた、十分に信頼できる完全な在庫品をいつまでも備えているという名声をうけていた。したがって、帝国のどこかでバッハ祭が催されることになって、バッハ時代の様式どおりに演奏するために、例えばオーボエ・ダモーレ、とうにオーケストラから消えてしまったこの低音のオーボエが必要になると、パロヒアール街の古い家に万全を期する音楽家が遠くからやって来て、実際にこの哀愁を帯びた楽器を試してみることが出来たのである。」⁽¹⁸⁾

まず、主人公のレーヴァーキューンの家と、楽器商である養父のニコラウスに関する記述を引用した。カイザーアッシュェルンに虚構の町の名前だが、マンの出生地であるリュウベックがモデルとされている。⁽¹⁹⁾ ここでは、ドイツにおける楽器製作に関する記述があるが、当時、楽器の収集や製作といった分野で名高かったベルギーやイタリアに引けを取らない程度に、ドイツも楽器が集まる中心地であったということを、マンが強調していることが窺われる。

続いて「バッハ祭」、つまりバッハ音楽祭への言及があり、さらには「バッハ時代の様式どおりに演奏するために」と書かれている。バッハ音楽祭は、ドイツで 1900 年代初めに急増した大規模な音楽会である。ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者でドイツ古楽協会の設立者であるデベライナーや、ハーブシコード奏者のマックス・ザイフェルト (1868-1948) の働きかけにより、バッハ音楽祭では歴史的な楽器が用いられていた。⁽²⁰⁾歴史的な楽器、つまり、オーボエ・ダモーレのようなバッハ時代の演奏を目指す HIP には必要不可欠であろう楽器がドイツで揃っていたことについても、マンはここで言及している。

引用 2

「中二階の部屋を占める楽器置場からは、しばしば、多様きわまる音色で、このような全音域に互る試奏が響いてきた、この楽器置場はすばらしい、魅惑的な、いや文化の魅力感を湛えたときえ言いたい光景を呈していて、音響的幻想を内的な沸騰にまで昂揚させるのであった。[中略] チェロの前身で、古い作品の中ではチェロと並んで重要な役割を果たした六弦のヴィオラ・ダ・ガンバも、[中略] ヴァイオリンのもう一人の同胞ヴィオラ・アルタと同様に、いつでもここで見られたし、わたしが生涯に互ってその七弦を楽しんできたヴィオラ・ダモーレも、もとはといえば、パロヒアール街のこの家から出たものである。」⁽²¹⁾

マンは、オーボエ・ダモアレに続き、弦楽器に言及している。デベライナーやパウル・グリュンマー（1879-1965）などのガンバ奏者や、ラインハルト・ヴォルフなどのヴィオラ・ダモアレ奏者は、主に1920年代以降に脚光を浴びるようになったが、彼らの使用していたオリジナル楽器に対する人々の関心は1940年代には十分に高まっていた、という印象が与えられる記述である。

引用 3

「ヴェンデル・クレッチュマルは〔中略〕オルガン奏者としてわたしたちのカイザースアッシェルンにやって来たのであった、〔中略〕彼がミヒャエル・プレトリウス、フローベルガー、ブクステフーデ、そして、言うまでもなくゼバスティアン・バッハのオルガン曲、それからヘンデルとハイドンとの最盛期の中間に当る時期の、今ではめったに聞かれないが当時流行したさまざまな作品を弾いた日曜の午後の入場無料の教会演奏会には、かなりの人々が集まった、アードリアーンとわたしもこれは欠かさず聞きに行った。」⁽²²⁾

1921年にフライブルク大学に設置されたプレトリウス・オルガンは、ライプツィヒのカール・シュトラウベ（1873-1950）が訪問演奏を行ったことにより、批評家が注目をした楽器である。また、このシュトラウベによる演奏会は、全てドイツのバロック音楽で構成されていた。⁽²³⁾

この引用部分では、プレトリウスに、フローベルガー、ブクステフーデ、バッハ、ヘンデル、ハイドンの、いわゆるドイツ・バロックの作曲家の名前が挙げられている。筆者は、フライブルク大学のオルガンとその演奏会を、マンはモデルにしたのではないだろうかと推測する。

引用 4

「わたし〔ツァイトブローム〕はアードリアーンの同郷人としてまた親友として、さらに、神学生ではなかったけれども神学に強い関心を持っているとみなされたので、キリスト教学生団体『ヴィンフリート』のサークルに客員として好意をもって迎えられ、グループをなして行われた、神の創造にかかる緑の沃野を楽しむこの遠出にたびたび参加することを許された。」⁽²⁴⁾

キリスト教学生団体のサークルがここで登場しているが、「緑の沃野を楽しむこの遠出」とは、第1節で述べたワンダーフォーゲルと関連する活動である、と筆者は推測する。先で述べたように、ワンダーフォーゲルは1910年代に起こった青年運動のことで、リュー

ト伴奏を用いたドイツ民謡の歌唱や、リコーダー演奏などのレクリエーションを活動として含んでいるために、古楽運動と関連が強いことが指摘できる。

引用 5

「彼〔レーヴァークューン〕は先生のクレッチェマルと一緒にバロックの宗教音楽を聴きにバーゼルに行ったのである、これはバーゼル室内合唱団がマーティン教会で開催したもので、そのオルガンのパートはクレッチェマルが受持つことになっていた。曲目はモンテヴェルディのマニフィカート、フレスコバルディのオルガン練習曲、カリッシミのオラトリオ、ブクステフーデのカンタータであった。」⁽²⁵⁾

この引用は、1943年のザッハー指揮、バーゼル室内合唱団による演奏会を指し示している。⁽²⁶⁾第1節でも先に述べたが、古楽の実践面と学術面を擁した研究機関であるバーゼル・スコラ・カントルムがあったバーゼルは、古楽の第一線で活躍する人にとって訪れたい場所であったことが考えられる。特に、ドイツの古楽運動の中にいた音楽家にとっては、活躍の場としても関心があったに違いない。マンは1943年当時、アメリカに住んでいたが、後にスイスに移ったことを特筆しておく。⁽²⁷⁾

おわりに

本稿では、『ファウストゥス博士』が書かれた1940年代までのドイツの古楽運動史を整理し、作品に見られる古楽の事象について比較検討を試みた。加えて、マン研究における古楽への着眼を、新たな研究の切り口として提示した。

研究の成果としては、『ファウストゥス博士』に、ドイツにおける古楽運動に関わる事象が見られた。楽器に関しては、ヴィオラ・ダ・ガンバやオーボエ・ダモーレなどの収集や演奏実践に関する記述、そして、オルガン運動で中心的存在だったプレトリウス・オルガンをほのめかす記述があった。これは、レーヴァークューンの時代、つまり20世紀中頃までのドイツにおいて、オリジナル楽器が注目されていたことを裏付ける記述としてみなすことが出来るだろう。加えて、ワンダーフォーゲルを彷彿とさせる、野外活動を含む学生団体のサークルに関する記述や、バーゼルでの演奏会の様子に関する記述は、1940年代までの古楽運動の様子を顕著に表している。

20世紀中頃までのドイツの古楽運動の歩みを概観すると、進展が足早だった戦前の一方、戦後ドイツの古楽の状況は、他の西欧諸国に遅れをとっていることが指摘できる。つまり、ドイツにおける20世紀の古楽運動は戦前と戦後で様相が異なる、といえる。ドイ

ツの古楽運動史をどのように再評価するのかについては、今後の研究で取り組みたい。加えて、マンが『ファウストゥス博士』という小説の世界で、なぜ、古楽に関わる事象を登場させたのか、といったマンの意図の解明については、今後の課題とする。

注

- (1) Mann, Thomas. 1974. *Gesammelte Werke in 13 Bänden*, 169. Frankfurt am Main: S. Fischer.
- (2) なぜ、ジャンルの呼称として「古楽」としてまとめられるかについては、バッハを境として、平均律が定着したことと、ヨーロッパの音楽作品の調性が教会旋法から長短調の音階へと変化したことが考えられる。
- (3) Haskell, Harry. 2001. “Early music.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. Vol. 7, 831-834.
- (4) ハスケル、ハリー 1998 『古楽の復活—音楽の「真実の姿」を求めて』有村祐輔訳、19-23、東京：東京書籍。
- (5) メンデルスゾーンの師で、バッハ復活における主導的役割を担ってきたカルル・フリードリヒ・ツェルターが、メンデルスゾーンに《マタイ受難曲》を引き合わせた、と言われている。
- (6) ハスケル ib. 17-19。
- (7) Harrison, Frank Ll. & Hood, Mantle. & Palisca, Claude V. P. 1963. *Musicology*, 41. New Jersey: Prentice Hall.
- (8) Blume, Friedrich. 1964. “Bach in the Romantic Era.” *The Musical Quarterly* 50: 290-306.
- (9) id. 305 においてブルーメは、「私たちの時代（19世紀）の文化の特色である文献学的で歴史学的な見方は、芸術作品が歴史的な考察と評価に基づいて享受されることと、作曲家が創作した通りに正確に作品が再演されることを要求している」というヤーンの言葉を引用している。
- (10) バートン、アントニー編 2011 『バロック音楽—歴史的背景と演奏習慣』角倉一朗訳、14-15、東京：音楽之友社。
- (11) id. 16-17。
- (12) ジェミニアーニの『ヴァイオリン奏法論』（1751）、クヴァンツの『フルート奏法試論』（1752）、C. P. E. バッハの『クラヴィーア奏法』（1753）、L. モーツァルトの『ヴァイオリン奏法』（1756）、アグリーコラの『歌唱芸術への手引き』（1757）が、その一例として挙げることができる。

- (13) 平均律を除き、歴史的な理論において系統づけることが可能な音律を指す。ヴェルクマイスター第三法、キルンベルガー第三法、ヴァロッティ・ヤング音律などが、古典調律の代表である。
- (14) ハスケル ib. 97。
- (15) 第2節でも述べるが、1921年、フライブルク大学に、プレトリウスの『シンタグマ・ムジクム』に基づくプレトリウス・オルガンが設置された。
- (16) ハスケル ib. 99-104。
- (17) 1936年のミュンヘン・オリンピックでは、リコーダー（古楽運動の一つとして注目を浴びていた）と打楽器による、過剰に脚色されたオルフの作品に合わせて、体操を行う演技が披露された。
- (18) Mann, Thomas. 1947. *Doktor Faustus: das Leben des deutschen Tonsetzers Adrian Leverkühn, erzählt von einem Freunde*, 61-63. Stockholm: Bermann Fischer.
（引用訳は、マン、トーマス 1971 『ファウストゥス博士——友人によって物語られた、ドイツの作曲家アドリアーン・レーヴァークューンの生涯』円子修平訳、42-43、東京：新潮社。）
- (19) 中村昌子 1987 「トーマス・マン『ファウストゥス博士』とドイツの悲劇」『駒澤大学外国語部論集』第26号：84。
- (20) ハスケル ib. 96。
- (21) Mann. ib. 63. (引用訳は、マン ib. 43。)
- (22) Mann. ib. 76-77. (引用訳は、マン ib. 52-53。)
- (23) Eggebrecht, Hans Heinrich. 1967. *Die Orgelbewegung* 35: 21.
- (24) Mann. ib. 177. (引用訳は、マン ib. 115。)
- (25) Mann. ib. 276. (引用訳は、マン ib. 181-182。)
- (26) 演奏会の詳細は、1977年にチューリッヒで出版された *Alte und Neue Musik II: 50 Jahre Basler Kammerorchester* を見よ。
- (27) ハスケル ib. 113。

参考文献

- Abel, Angelika. 2003. *Musikästhetik der klassischen Moderne*. Munich: Fink Wilhelm.
- Ball, David J. T. 1986. *Thomas Mann's Recantation of Faust: Doktor Faustus in the Context of Mann's Relationship to Goethe*. Stuttgart: Hans-Dieter Heinz Akademischer.
- Blume, Friedrich. 1964. "Bach in the Romantic Era." *The Musical Quarterly* 50: 305.

- パートン、アントニー編 2011 『バロック音楽——歴史的背景と演奏習慣』角倉一朗訳、東京：音楽之友社。
- Eggebrecht, Hans Heinrich. 1967. *Die Orgelbewegung* 35: 21.
- Harrison, Frank Ll. & Hood, Mantle. & Palisca, Claude V. P. 1963. *Musicology*, 41. New Jersey: Prentice Hall.
- ハスケル、ハリー 1998 『古楽の復活——音楽の「真実の姿」を求めて』有村祐輔訳、東京：東京書籍。
- Haskell, Harry. 2001. “Early music.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. Vol. 7, 831-834.
- Kenyon, Nicholas. 2002. *Authenticity and Early Music*. Oxford University Press.
- Mann, Thomas. 1947. *Doktor Faustus :das Leben des deutschen Tonsetzers Adrian Leverkühn, erzählt von einem Freunde*. Stockholm: Bermann Fischer.
- 1974. *Gesammelte Werke in 13 Bänden*, 169. Frankfurt am Main: S. Fischer.
- マン、トーマス 1971 『ファウストゥス博士——一友人によって物語られた、ドイツの作曲家アドリアン・レーヴァーキューンの生涯』円子修平訳、東京：新潮社。
- 長橋芙美子 1980 「トーマス・マンの『ファウストゥス博士』におけるデューラーの意味——覚え書」『大阪市立大学人文研究』第 32(3)号：133-145。
- 中村昌子 1987 「トーマス・マン『ファウストゥス博士』とドイツの悲劇」『駒澤大学外国語部論集』第 26 号：81-98。
- 佐々木節夫 2000 『古楽の旗手たち——オリジナル楽器演奏のめざすもの』東京：音楽之友社。
- シュレーター、クラウス 1981 『トーマス・マン』山口知三訳、東京：理想社。
- 関根敏子 1993 『クラシック音楽の 20 世紀第四巻——古楽演奏の現在』東京：音楽之友社。
- Sherman, Bernard. 1997. *Inside Early Music: Conversations with Performers*. Oxford University Press.
- 下程息 1996 『「ファウストゥス博士」研究——ドイツ市民文化の「神々の黄昏」とトーマス・マン』東京：三修社。
- Taruskin, Richard. 1995. *Text and Act*. New York: Oxford University Press.
- 山室信高 2016 「音楽の理性と魔性——マックス・ヴェーバー『音楽社会学』からトーマス・マン『ファウストゥス博士』へ」『東洋大学経済論集』第 41(2)号：137-155。

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目
(2015 年度)

修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目

1. 作曲専攻(作曲) …………… 浅井 ちひろ
(演奏曲名)
Borderline between I and the World

(論文名) 現代音楽作品の感受における情動に及ぼす影響についての考察

修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目

2. 声楽専攻(オペラ) …………… 奥村 哲
(演奏曲名)
Giuseppe Verdi ジュゼッペ・ヴェルディ
《Don Carlo》より

(論文名) ヴェルディの《ドン・カルロ》におけるロドリゴの人物像 -シラーの原作「スペインの太子ドン・カルロス」と比較して-
3. 声楽専攻(オペラ) …………… 谷口 耕平
(演奏曲名)
Gioachino Rossini ジョアキーノ・ロッシーニ
《La Cenerentola》より

(論文名) ドランマ・ジョコーソとしてのロッシーニの《ラ・チェネレントラ》の特徴
4. 声楽専攻(オペラ) …………… 松浦 綾子
(演奏曲名)
Richard Strauss リヒャルト・シュトラウス
《Ariadne auf Naxos》より

(論文名) R・シュトラウスの《ナクソス島のアリアドネ》におけるツェルビネッタという女性 -アリアドネと比較して-
5. 声楽専攻(オペラ) …………… 南 さゆり
(演奏曲名)
Giacomo Puccini ジャコモ・プッチーニ
《La Bohème》より

(論文名) プッチーニの《ラ・ボエーム》におけるミミという女性 ～ミュルジェの原作・レオンカヴァッロの《ラ・ボエーム》との比較を通して～

6. 声楽専攻(歌曲) 住澤 怜伽
(演奏曲名)

Johann Sebastian Bach ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
《Mein Herze schwimmt im Blut》 BWV 199
Rezitativ: Mein Herze schwimmt im Blut
Arie und Rezitativ: Stumme Seufzer, stille Klagen
Aria Rezitativ: Doch Gott muß mir gnädig sein
Arie: Tief gebückt und voller Reue
Rezitativ: Auf diese Schmerzensreu
Choral: Ich, dein betrübtes Kind
Rezitativ: Ich lege mich in diese Wunden
Arie: Wie freudig ist mein Herz

(論文名) J.S.Bach《Mein Herze schwimmt im Blut》BWV199 におけるプロテスタントの「救い」の定義

7. 器楽専攻(ピアノ) 瀬崎 紀子
(演奏曲名)

Maurice Ravel モーリス・ラヴェル
マ・メール・ロワ (J.シャルロ編)
1. 眠れる森の美女のパヴァーヌ
2. 親指小僧
3. 首振り人形の皇妃レドロネット
4. 美女と野獣の対話
5. 妖精の園

ダフニスとクロエより 第三幕
夜明け ～ パントマイム ～ 全員の踊り

ラ・ヴァルス

(論文名) 仮面としての舞踏 ～ラヴェルのバレエ作品に関する一考察～

8. 器楽専攻(ピアノ) 乾 将万
(演奏曲名)

Franz Liszt フランツ・リスト
《詩的で宗教的な調べ》より「アヴェマリア」 S.173-2
ピアノ・ソナタ ロ短調 S.178

(論文名) F.Liszt の《ソナタ S.178》に内在する音楽思想

9. 器楽専攻(ピアノ) 川邊 由布子
(演奏曲名)

Charles Gounod= Franz Liszt シャルル・グノー=フランツ・リスト
歌劇「ファウスト」よりワルツ S.407
歌劇「リゴレット」による演奏会用パラフレーズ S.434
《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》序曲 S.442

(論文名) リストのトランスクリプションについての一考察 ～オペラ作品を中心に～

10. 器楽専攻(ピアノ) 佐藤 亜衣
(演奏曲名)

Maurice Ravel モーリス・ラヴェル
高雅で感傷的なワルツ
夜のガスパール

(論文名) ラヴェル《夜のガスパール》～音楽における19世紀末デカダンス

11. 器楽専攻(ピアノ) 西根 里絵
(演奏曲名)

Sergei Rakhmaninov セルゲイ・ラフマニノフ
前奏曲 嬰ハ短調 op. 3 第2番
13の前奏曲 op. 32 第2, 4, 12, 13番
ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調 op. 36 (1931年改訂版)

(論文名) S.ラフマニノフのピアノ作品におけるロシア正教 ～「鐘」「Dies Irae」を巡って～

12. 器楽専攻(ピアノ) 長谷川 護
(演奏曲名)

Johannes Brahms ヨハネス・ブラームス
ピアノ・ソナタ 第3番 ヘ短調 op. 5

(論文名) ブラームスがピアノに求めた響き ～ピアノ・ソナタ第3番 ヘ短調 作品5を通して～

13. 器楽専攻(ピアノ) 八塚 真秀
(演奏曲名)

Robert Schumann ローベルト・シューマン
ダーヴィト同盟舞曲集 op. 6

(論文名) シューマンの初期ピアノ作品における内面性 ―ダーヴィト同盟に潜むもの―

14. 器楽専攻(管弦打) 西川 静
 (演奏曲名)
 安倍 幸明 Komei Abe
 アルトサクソフーンとピアノのための嬉遊曲
- 細川 俊夫 Tosgio Hosokawa
 Vertical Time Study II
- 酒井 健治 Kenji Sakai
 Between the wave and the memory - Side A -
- (論文名) 日本におけるクラシカルサクソフーンの黎明期 —大澤壽人・安倍幸明の作品を中心に—
15. 器楽専攻(管弦打) 藤田 麻緒
 (演奏曲名)
 Thierry Escaich ティエリー・エスケシュ
 Lutte
- 神本 真理 Kamimoto Mari
 Cubic gradation
- Frédéric Durieux フレデリック・デュリュユー
 Étude n.1
- Alfred Desenclos アルフレッド・デザンクロ
 Prélude, cadence et Finale
- (論文名) 1970年以降のサクソフーン作品における奏法の多様化
16. 器楽専攻(管弦打) 金井 晶子
 (演奏曲名)
 Georg Friedrich Händel ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル
 Suite in D major
- Leopold Kozeluch レオポルト・コジェルフ
 Sinfonia Concertante in E-flat major
- Giuseppe Verdi ジュゼッペ・ヴェルディ
 Adagio
- Johannes Brahms ヨハネス・ブラームス
 12 Etüden für Trompete
- Karl Pilss カール・ピルス
 Sonata für Trompete und Klavier

(論文名) 歴史的トランペットの構造、奏法、習得法

17. 器楽専攻(管弦打) 宮田 晴奈

(演奏曲名)

Ralph Vaughan Williams レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ
Romance & Pastorale

Hubert Parry ヒューバート・パリー
Sonata in D for pianoforte and violin

Edward Elgar エドワード・エルガー
Chanson de nuit Op.15 No.1
Chanson de matin Op.15 No.2

(論文名) イギリス音楽の「復興」におけるパリー、スタンフォード、エルガーの役割 —ヴァイオリン作品を中心に—

[作曲者名、演奏曲名は修士演奏会のプログラムに基づく。また、論文名は本人記載の題目届に拠る。]

2016年度 研究助成報告

研究助成

特別研究(芸術分野)

実施日順

- ・青柳いづみこ ドビュッシーをめぐると新しい潮流<1916年>
(2016年10月15日(土)14:00 HAKUJU HALL)
2016年12月2日 報告書提出

- ・松田昌恵 松田昌恵 ソプラノ リサイタル
(2016年11月2日(水)19:00 ザ・フェニックスホール)
2017年2月 報告書提出予定

- ・土井 緑 土井 緑 ピアノリサイタル ～パリで煌めく作曲家達 Vol.2～
(2016年11月24日(木)19:00 ザ・フェニックスホール)
2017年2月 報告書提出予定

- ・北野裕司 北野裕司 ピアノ・リサイタル
(2016年12月15日(木)19:00 ザ・フェニックスホール)
2017年1月19日 報告書提出

執筆者一覧 (掲載順)

西村理 (音楽学)

植朗子 (外国語)

高橋徹 (教養教育)

杉山恵梨 (教職)

研究委員会構成員 (五十音順)

北野裕司 駒井肇

住谷秀夫 高橋徹

田中由也 土井緑

西村理 *橋本龍雄

藤本敦夫 松本昌敏

*印は編集代表

研究紀要 第五十五号

2017年3月1日 発行

(2017年3月31日 WEB公開)

編集

研究委員会

発行

大阪音楽大学

大阪音楽大学短期大学部

〒561-8555

大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番8号

電話 06-6334-2136

URL : <http://www.daion.ac.jp/>

ISSN 0286-2670

BULLETIN
OF
OSAKA COLLEGE OF MUSIC

Vol. LV

2016

Contents

Summaries (1)

Articles

1928 Schubert Centenary in Vienna: An Analysis of Music Festivals and Radio Programs
..... NISHIMURA Osamu (5)

Das Kind als das Motiv und die Wunder in den *Deutschen Sagen* der Brüder Grimm
..... UE Akiko (22)

Notes

Introduction of Project-Based Learning into the First Year Experience of Osaka College of Music
- Analysis of a questionnaire responses -
..... TAKAHASHI Tohru (35)

A View of Early Music in Thomas Mann's *Doktor Faustus* SUGIYAMA Eri (48)

Published by
Osaka College of Music
Osaka Junior College of Music
Osaka
JAPAN